

Title	平成二十四年度博士論文(課程)要旨
Author(s)	
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2014, 54, p. 117-159
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54057
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

平成二十四年度博士論文(課程)要旨

ベルクソンにおける自由と直観について

――「働く」時間と否定の力を通して-

野 一比古

平

ベ することになる、そういう明確な態度をせまる観点であるからで ける時間の捉え方や分析的な知性との対比が際立ち、意識におい 根底をなすと考えられるからである。第三にこの観点は科学にお 第一にこの観点がベルクソンの哲学において、もっとも揺るぎ難 う捉える否定の力を持つ直観を通して、ベルクソンの哲学におい ある。第四に、この観点を認めれば、基本的にベルクソンの哲学 知性的な把握を、 てこの観点を取る場合は、科学の予測法則における時間や分析的 いと考えられ、第二にベルクソンの思想の発展の上からも、その にしようとする。「働く」時間と否定的な直観に注目するのは、 えられることを妨げる)というベルクソンの時間の捉え方と、そ て重要な位置を占める自由と直観とはどのようなものかを明らか ルクソンの哲学と他の哲学とを分かつと、ベルクソン自身が後 側に身を移すことになる。 本論考は、 時間は 意識においては十分なものではないとして否定 「働く」(時間が、すべての状態が一挙に与 時間が「働く」ことを認めることが

その点からだけでも重要である。での点からだけでも重要である。第五に、時間は「働く」という年記るような重要な観点である。第五に、時間は「働く」という年語るような重要な観点である。第五に、時間は「働く」という

で明らかにする。 *correspondances*の手紙にも基づき、諸資料注によって明らかにする。そして、この反省が、自由の一つの根拠であること、不定の力を持つ直観に基づく「働く」時間の把握であること、否定の力を持つ直観に基づく「働く」時間の把握であること、否定の力を持つ直観に基づく「働く」時間の把握であること、不知らかにする。

見できない新たなものの創造がないため、自由とは考えない。見できない新たなものの創造である。ベルクソンは、通常、自由と考えられることの多い選択の自由について、選択とは、既に選択肢として予見されているその範囲内での選択でしかなく、そこには予して予見されているその範囲内での選択でしかなく、そこには予して予見されているその範囲内での選択でしかなく、そこには予して予見されているその範囲内での選択でしかなく、そこには予して予見されているその範囲内での選択でしかなく、そこには予して予見されているその範囲内での選択でしかなく、そこには予して予見されているその範囲内での選択でしかなく、そこには予して予見されているその範囲内での選択でしかなく、そこには予して予見されている。自由とは考えない。

直観による把握は、単にその直観だけによるのではなく、他の道第三章直観では、意識における持続の直観の確実性を検討する。

れている。この意味で直観は確実性を持つと言える。をその諸状態が相互に浸透する不可分な全体と捉える、直接的な直観は、否定の力を持つ直観(対象を空間的な可分なものとしてによる把握に支えられるとき、より確実性は増すと言える。意識

覚を明確に批判する観点を与えるものへと発展して来ている。 5 と考えること全般に対する否定へと、普遍化されていることが明 と考えられているときの観念のこと)が錯覚であることを強調す 0) 反省から、 としての観念の一つである)を意識においては否定する出発点の 諸状態がそのまま実現すると考えること(これは「可能的なもの」 の創造はなされないことになる。すべてが一挙に与えられ、その る。この意味の わば可能的なものとして)存在し、その観念がそのまま実現する の内容がそのまま実現するのだから、その観念にない新たなもの うベルクソンの哲学の重要な論点に関し、 いてあるのではなく、 かである。否定的な直観は、 ルクソンは晩年、 錯覚に対する批判と出発点の反省との関係について検討する。 第四章 「可能的なもの」の錯覚とベルクソンの出発点では、 「可能的なもの」としての観念が実在に先立ってある 「可能的なもの」では、既に考えられている観念 「可能的なもの」(実在に先立って観念が その晩年において、 単にベルクソンの出発点の反省に 新しいものの創造と その創造を見誤る錯 · 言

があるということを揺るぎないものにしている。内容の一つである、意識や世界の全体において新しいものの創造的な直観を支えながら発展しており、ベルクソンの哲学の重要なの力を持つ直観による「働く」時間の把握は、持続の直接

推定できる。) 未見。)版による相違、 第四版はLe Sudocに記載の図書館では所蔵しないことが分かり Sudoc)に記載されているもの、および1908年版 Alcan版としてページ付けのわずかに異なる二つの版が出ている。 ジの指定が若干ずれている。また、『試論』には、この頃までに とウィリアム・ジェームズ宛の手紙(1908/5)ではそのペー かかわる なものと実在的なもの」 1889、1898、1901、1906年の各版。1904年の (Aタイプ:1889年のsoutenance 用としてカタログ ては、ベルクソンからヘフディングに宛てた手紙 注 『試論』における、本稿で言う反省の出発点の箇所に関し 『試論』 の主要な段落は、 ページ指定のズレはあるものの、 の出発点の叙述も考慮すれば、 本文中 (p7の注) (1906/1) Bタイプ: の段落と 出発点に 「可能的

中国新出土文献の研究

――上博楚簡・清華簡・銀雀山漢簡 –

金城未来

遷過程を明確にしようと試みるものである。制約により不明瞭とされてきた古代思想史の空白を埋め、その変漢代初期)の新出土文献(竹書)を研究対象とし、従来、資料的本研究は、近年陸続と発見されている中国古代(主に戦国期~

本論文では、新出土文献の中でも「上海博物館蔵戦国楚竹書(上本論文では、新出土文献の中でも「上海博物館蔵戦国楚竹書(銀博楚簡)」「清華大学蔵戦国竹簡(清華簡)」「銀雀山漢墓竹簡(銀博楚簡)」「清華大学蔵戦国竹簡(清華簡)」「銀雀山漢墓竹簡(銀世之)」「銀雀山漢墓竹簡(銀世)」「銀雀山漢墓竹館(銀世)」「銀雀山漢墓竹館(銀世)」「銀雀山漢墓竹館(銀世)」「銀雀山漢墓竹館(銀世)」「東海東の深い文献であるうことが、先行研究において指摘されている。以上の点を踏まえ、以下、本論文の構成および研究成果であるが、中には楚国に関する史実が記載された文献も含まれている。以上の点を踏まえ、以下、本論文の構成および研究成果である。以上の点を踏まえ、以下、本論文の構成および研究成果である。以上の点を踏まえ、以下、本論文の構成および研究成果である。以上の点を踏まえ、以下、本論文の構成および研究成果である。以上の点を踏まえ、以下、本論文の構成および研究成果である。

年より図版・釈文が次々と公開されている「上博楚簡」を取り上第一部「『上海博物館蔵戦国楚竹書』の研究」では、二〇〇一

0)

、概要を述べる。

げて検討した。

保持し活用していた情況をも窺い知ることができた。ではなく、楚国が独自の歴史解釈や上帝鬼神などの殷代的思考をかし、これらの文献内容からは、中原の思想文化を受容するだけかし、これらの文献内容からは、中原の思想文化を受容するだけるの結果、両文献を考察することにより、戦国中期頃の楚には、

清華大学が入手した「清華簡」を取り上げて検討した。第二部「『清華大学蔵戦国竹簡』の研究」では、二〇〇八年に

また第二章では、孔壁古文逸書の一篇『咸有一徳』との関連が指今本で曖昧だった字義や、いまだ論争中の問題について検討した。れる清華簡『周武王有疾周公所自以代王之志(金縢)』を取り上げ、本部第一章では、今本『尚書』金縢と同一内容の文献と考えら

尹 深い文献に見られる特徴であったことが明らかとなった。さらに は、 報を提供するものであることが改めて理解できた。また第二章で 縢において、不明確であった字義(「逆」字や「郊」字の解釈)や、 摘されている清華簡 清華簡全体にも、そのような呼称明記の特質を認めることができ 論争中の論点 以上の検討を行った結果、 (殷代、湯に仕えた聖賢) 伝世文献中、 (別文献の誤入説)を考える上で、極めて有用な情 伊尹を「伊摯」と記すのは、 『尹誥』 を中心に取り上げ、そこに見える伊 清華簡『金縢』は、今本『尚書』金 の呼称表記について考察を加えた。 南方諸国と関連の

加えた。 省臨沂県の漢墓より出土した「銀雀山漢簡」を取り上げて考察を 第三部 「『銀雀山漢墓竹簡』 の研究」では、一九七二年に山東

0)

(二〇一〇年一月、文物出版社) に所収の「論政論兵之類」 「兵之恒失」と「五議」を取り上げ、『孫子』や 本部では、古逸兵書の中でも、 他の伝世兵書との関連にも目を向けつつ、その思想的特質を 特に 『銀雀山漢墓竹簡 『孫臏兵法』 『呉子』 の二篇 夏

らを展開させたと考えられる内容が含まれていることが明らかと その結果、古逸兵書である「兵之恒失」と「五議」には、『孫子』 『呉子』などの兵権謀家的思想を受け継ぎつつも、 さらにそれ

明らかにすることを目指した。

等の古代兵学がどのように受容され展開したか、その空白の一部 を僅かながら示すことができたものと考える なった。本部における検討により、『孫子』や『孫臏兵法』『呉子』

従来窺い知ることのできなかった中国古代思想の影響関係や変遷 の諸子の思想と類似する点が含まれていたことを明確にした。本 考察することにより、 研究において、多角的視点から新出土文献を検討することにより の書と考えられる「銀雀山漢簡」にも、 いたことを明らかにした。また、時代は僅かに下るものの、兵家 同時に、それとは異なる独自の思想・表現方法をも合わせ持って 一端を明らかにすることができたと考える。 本論文では、 楚地出土と考えられる「上博楚簡」「清華簡」 楚地が、中原の思想を積極的に受容すると 儒家や法家など、その他

ヤジュルヴェーダ・サンヒターのブラーフマナの 記述を中心とするヴァージャペーヤ祭の研究

池 田 宣 幸

ヤ祭を研究対象とし、 5つのブラーフマナであるマイトラーヤニーサンヒター 本論文では、古代インドのヴェーダ祭式の1つヴァージャペー ヤジュルヴェーダ (YV)・サンヒター所

0)

の読解及び学派ごとの比較検討を行った。 タパタ・ブラーフマナ(SBM, ŚBK)の該当箇所の原典テキストフマナ(TB)、マーディヤンディナ及びカーンヴァ両学派のシャ

と4章の2つの章である。本論は全5章で構成されるが、論文の根幹となる部分は第3章

独では「祭主」として、インドラとの関係の中では、「祭主=イ ラはスヴァラージュになった。神話においてブリハスパティは単 ティが祭官としてインドラのために祭式を執り行うことでインド 神話に描かれていることは全てのブラーフマナに共通するが以後 ら示唆される。ヴァージャペーヤをめぐって神々は競走するが する全てのブラーフマナに共通している。同祭式においてはブリ まとまった記述が冒頭部分にみられることは今回扱ったYVに属 祭式を構成する個別の儀礼の規定に先立って、祭式全体に関する ンドラ」に対する「祭官」としての2つの役割を担っている。さ パティは原初に祭主としてヴァージャペーヤを挙行した者として ブリハスパティが競走に勝利し、この祭式を勝ち取る。ブリハス 体に関する記述をみた。ヴァージャペーヤ章の冒頭部分では、 ハスパティとインドラが主要な役割を担っていることが因縁譚か 展開は学派間で異なった様相を見せる。黒YVではブリハスパ 第3章ではヴァージャペーヤ祭の因縁譚をはじめとした祭式全 同

らにMS. KSではブリハスパティとインドラの関係をプローヒタ(筆頭祭官)と王との関係になぞらえている。MS. KSの神話では (筆頭祭官)と王との関係になぞらえている。MS. KSの神話では バリハスパティとインドラの間に差異はなく共にヴァージャペーヤを 祭主として行ない、その果報を享受している。TBではブリハスパティとインドラと同様ヴァージャペーヤによってスヴァラー ジュになると述べられている。TBではまだインドラとの間に祭言・祭主という関係性をもって述べられているが、SBではブリハスパティとインドラと同様ヴァージャペーヤによってスヴァラー ジャペーヤにおいて重要な位置を占めると思われるブリハスパティとインドラの因縁譚における位置づけや両者の関係をプローヒタ 観点から学派間の違いを導き出した。

たはインドラが勝利する為の競走であり、祭主は所属階級に関係が前面に登場する点が注目される。ここで行なわれている戦車競が前面に登場する点が注目される。ここで行なわれている戦車競が前面に登場する点が注目される。ここで行なわれている戦車競が前面に登場する点が注目される。ここで行なわれている戦車競が前面に登場する点が注目される。ここで行なわれている戦車競が前面に登場する点が注目される。ここで行なわれている戦車競が前面に登場する点が注目される。ここで行なわれている戦車競が前面に登場する点が注目される。ここで行なわれている戦車競車機利の

なくインドラになぞらえられていると見ることができる。この姿勢はTBにはっきり示されている。ヴァージャペーヤという祭式全体の枠組みの中では祭主はブリハスパティとの結びつきが強く全体の枠組みの中では祭主はブリハスパティとの結びつきが強くを体の枠組みの中では祭主はブリハスパティとの結びつきが強くを除るため、またこの時祭主の所属階級には言及がない。一方、白YV学派の規定する戦車競走ではブリハスパティとインドラ両方が競走に参加していることを喚起する文言のマントラが様々なの文言が異なる。祭官階級の成員の場合はブリハスパティの名が出てくるマントラが、王族階級の成員の場合はインドラの名が出てくるマントラが用いられ、このことは祭主の階級により、競走者はブリハスパティとインドラのいずれかになぞらえられていることを示している。

本論ではヴァージャペーヤにおけるブリハスパティとインドラを操って、それらが特定の祭式において、あくの神々が当該祭式を成立せしめる上で不可欠な構成要素として多様な形で随所に登場するが、今回注目したブリハスパティとインドラがそうであったよるが、今回注目したブリハスパティとインドラがそうであったよるが、今回注目したブリハスパティとインドラがそうであったよるが、今回注目したブリハスパティとインドラがそうであったよるが、今回注目したブリハスパティとインドランに、現実の階級社会の成員を象徴するような存在としてとらえるが、今回注目したブリハスパティとインドランに、現実の階級社会の成員を象徴する役割を注意深く観察

論は一つの方向性を具体的に示すことができたと考える。究ではそうした視点がさほど顧慮されなかったという点では、本していったかを紐解く手掛かりが得られよう。これまでの祭式研すれば、いかなる社会的要請によりそのような祭式が成立し展開

室町時代の禅宗と文化受容

芳 澤 元

関係づけの不備など、 が明らかになった。その後、 鎮護国家を担った顕密仏教が、中世社会においても国家権力との 録・詩文集 5 相互補完を主張しながら、自立した寺社勢力として屹立したこと な傾向から距離をおいた玉村竹二らによって、禅宗寺院制度や語 日本文化論の文脈のなかで強調された。戦後になると、日本論的 よりも、 他方、 戦前の室町時代研究は、現在とは異なり、 室町時代の仏教史では、とりわけ禅宗の文化的な影響力が 中世仏教史では、 むしろ文化史中心の議論が主流だった。そうした傾向か (五山文学) の基礎的研究が固められることになった。 顕密体制論を批判的に継承する研究が登場 黒田俊雄の顕密体制論により、古代、 室町時代への展望の弱さ、 政治史研究や王権論

議論がつづいている。

最近の研究ではやや低迷している。 研究、とくに後者は、いまも玉村の業績に負うところが大きいが 基盤や顕密諸宗との位置関係など、玉村が扱わなかった問題まで 研究では、一部の代表的な高僧だけでなく、それを支えた民衆的 論じられるようになった。その一方で、五山十刹制度や五山文学 少なからぬ懸隔がみられる。顕密体制論を意識した最近の禅宗史 だが、こうした近年の研究動向と、玉村竹二の業績との間には

えで、 きた。こうした往年の玉村の仕事を、最新成果とどう結合させる 用語が多いため、 界の漢文は、和製漢文とは大きく異なるうえ、独特の隠語や仏教 録・詩文集は、単に中国からの直輸入の産物ではなく、当時の禅 知識や情報は受容されていた。とはいえ、日本中世に編まれた語 比叡山や南都寺院にも、さまざまな書籍を通して、つとに宋元の 報が豊富で、宋元の仏教儀礼や習俗を色濃く伝えるところにある。 べきか。とりわけ五山文学史料を、今後の歴史学がどう活用する 宗寺院をとりまく社会情勢や習俗をも含み込んだ内容になってお もっとも、禅宗史料に限らず、当時の政治史や人的関係を知るう 歴史史料としての語録・詩文集の特徴は、政治権力に関する情 同時代史料として固有の価値を秘めている。だが、禅宗の世 聖教・典籍類などの仏教史料の有効性は知られているし、 日本史研究者の多くはその積極活用を敬遠して

かが、新たな課題といえる。

院社会と世俗社会の相互関係や、日本と中国の文化交渉を、歴史 そこで本論文では、語録・詩文集と日記・古記録を駆使し、 寺

的・立体的に捉えなおすことを目指した。

会との相互交流の実態を具体的に解明し、その思想的背景を明ら 第Ⅰ部では、中世禅宗をめぐる固定観念を排し、彼らと世俗社

かにした。

作文が公認されており、室町時代の禅宗寺院が、漢詩文・作文能 解されてきた。しかし、鎌倉後期には禅宗寺院の入門試験に作詩 としたことから、これまで禅僧の文芸の広まりは宗教的堕落と理 力に秀でた人材育成を担っていた(第Ⅰ部第一章)。 たとえば、座禅を重視する蘭溪道隆が、文字言語を修行の妨げ

化した。その背後には酒屋・寺院醸造の進展や、持戒を仏道修行 の根本とみない考え方が潜んでいた が流布し、 る存在と評価してきたが、実際には、破戒肯定・飲酒容認の論調 また、従来の研究は、中世禅僧を旧仏教と異なり戒律を遵守す 室町将軍家の仏事でも、 慰労の席で酒宴の慣行が恒例 (第Ⅰ部第二章)。

出す意識があり 武家の山荘・寺庵生活には、 こうした禅宗寺院の実態と思想は、世俗社会にも影響を与えた。 (居士) に法語や肖像画賛を与え、弓馬の術や和歌の才など、 (市中の山居)、 山林隠遁よりも都市生活に価値を見 五山僧は、 公家や武家の在家信

徒

彼らの職業活動を顕彰した。その背景に、聖と俗の二元論を否定 仏法と世法の融和をとく思想があったのである (第Ⅰ部第三

章。

動とその歴史的背景や広がりを明らかにした 僧の漢詩文や絵像・画軸などの分析を通して、 第Ⅱ部では、 第Ⅰ部で解明した禅宗寺院の実態をふまえ、 中世禅僧の文芸活 五山

像が、 で受容されたのである。 唐天神説話の画軸と漢詩が、 神を詩題にした異文化交流が行われ、十五世紀初頭には渡唐天神 の足利義持に献上されたことを考証した (第Ⅱ部第一・二章)。渡 ついても、 (第Ⅱ部第三章)。 具体的には、 西国の有力守護である大内盛見から、 前田利家夫人が所蔵した女人図を素材として復元した 十四世紀末には日本僧と中国文人の間で、 なお、こうした絵像や画軸の製作過程に 京都 地域社会 五山僧を介して京都 中国をまたい 北野天

育志向や、 える視座を追究したものである。 俗人に対しては家業や職能を尊重した事実を明確にした。いずれ の禅僧が、 以上のように、 個別寺院や特定の教義によらず、 漢詩文を介して地域を超えて広がる人的交流を重んじ、 むしろ仏法と世法の融和という立場のもと、文才の教 戒律を守り座禅に専念すると思われてきた中世 仏教を社会全般のなかで捉

北宋の軍事政策と東部ユーラシア情勢

伊 藤 馬

整備 そして、范仲淹の編制した「将」が、このような戦略の中核とし それへの対処に重点を置く戦略が意図されていたことを指摘した。 づいていたのかを検討した。その結果、 ての役割を担っていたのである。 第1章では、 本論文では、 軍事情勢の変遷を対外情勢との関連を視野に入れつつ述べた。 ・確立された経略安撫使体制が、どのような対西夏戦略に基 仁宗期に勃発した宋夏戦争に際して、陝西地域で 北宋の陝西地域を中心に、 西夏軍の侵攻を前提とし、 地方軍事体制、 軍事 政

策

神宗期の将兵制にどのように結びついていくのか、その具体的な 夏戦争や熙河経略などの軍事行動において 過程や背景を追究した。まず宋夏戦争以降の陝西地域においても ことを指摘した。 しており、 将 第2章では、 が存在していたことを明らかにし、 陝西地域の情勢の変化と連動して 仁宗期の対西夏戦略の中核を担っていた「将」が 同時に、 軍事行動の中で、 神宗期に入っても対西 「将」が中核であった 将 「将」を中核とする の規模も拡大

あり、決して画一的・均質的ではなかったのである。地域、東南諸路における将兵制の成立には各地域の情勢が背景に諸路にも援用、拡大される。ただ、注意すべきは陝西地域、河北制の全面的な再編制として将兵制が成立すると、河北地域や東南軍事体制も変遷していた。そして、熙寧七年に陝西地域で軍事体

第3章では、将兵制が地方軍事体制や官僚制の中にどのように位置付けられ、地方統治体制においてどのような役割を担っていたのかを検討した。その結果、哲宗期以降、陝西地域では「将」が管轄区域を有する軍政機関としての性格を有し、民政とも不可がの役割を果たしていたこと、「将」の指揮官である将官が官僚体系において路分都監の下位に明確に位置付けられるとともに、軍政統轄官と実戦指揮官という二つの役割を担っていたことを指摘した。将兵制は軍事のみならず民政にも密接に関わっており、第3章では、将兵制が地方軍事体制や官僚制の中にどのように第3章では、将兵制が地方軍事体制や官僚制の中にどのように第3章では、将兵制が地方軍事体制や官僚制の中にどのように

安撫司―「将」との間で箚付―申という文書書式の授受関係が認統属関係とがパラレルになっていたことを指摘した。また、経略において、「将」―堡寨という統属関係と府/州/軍―県というな書書式や授受関係を手がかりとして、陝西地域の地方統治体制の構造を検討した。その結果、陝西地域の地方統治体制の構造を検討した。その結果、陝西地域における地方の大学書式や授受関係を手がかりとして、陝西地域における地方の大学書式の授受関係が認

ると同時に、モンゴル時代の文書行政にも繋がる過渡期とみなす〜南宋最初期という時期は、唐代の文書行政のありかたを継承すめられる。「将」を取り巻く文書行政のありかたから、北宋末期

ことができるのである。

窺える。 第5章では、「宋西北辺境軍政文書」に見える逃亡兵招収関連文書を取り上げ、北宋滅亡~南宋成立期における中央政府と陝西地域の関係、陝西地域における軍事情勢を検討した。まず、「宋西北辺境軍政文書」に引用される赦書が南宋成立時に下された赦書であり、その赦書が成立直後の南宋中央政府と陝西地域とを結ぶとともに、陝西地域における軍備再建の円滑化、効率化に作用ぶとともに、陝西地域における軍備再建の円滑化、効率化に作用にたと指摘した。また、陝西地域の軍備再建に介在する「将」の後から、兵員管理や軍事力掌握が「将」を単位としていたことが変から、兵員管理や軍事力掌握が「将」を単位としていたことが変から、兵員管理や軍事力掌握が「将」を単位としていたことが変から、兵員管理や軍事力掌握が「将」を単位としていたことが変から、兵員管理や軍事力掌握が「将」を単位としていたことが変から、兵員管理や軍事力掌握が「将」を単位としていたことが変から、兵員管理や軍事力掌握が「将」を単位としていたことが変から、兵員管理や軍事力掌握が「将」を単位としていたことが変から、兵員管理や軍事力掌握が「将」を単位としていたことが変から、兵員管理や軍事力である。

以上を通じて、北宋の軍事政策が対外情勢と密接に連動して展開していたこと、中でも西夏と対峙する陝西地域が軍事的な先進地域となっており、軍事と民政の不可分な統治体制が構築されていたこと、その中で「将」が地方統治に定着していたことなどが言えよう。このような北宋軍事政策、軍事制度の展開は、建国当司巻く国際情勢への対処の帰結であり、北宋軍事政策が対外情勢と密接に連動して展以上を通じて、北宋の軍事政策が対外情勢と密接に連動して展出、

した。

都市社会と秩序形成の展開14 – 16世紀ミュンヘンの

垣聡

紫

どのように変わるのかを明らかにすることが重要である。こうし を排除して都市の秩序を掌握するのではなく、両者がともに秩序 として機能するものだった。近年の研究では、そのどちらかが他 習俗と結びついた、暴力的な要素を内包する社会的コントロール とは異なる論理による秩序が存在していた。それは民衆の文化 形成されていたのか。 を形成していたことが明らかにされてきた。したがって統治権力 よばれる一連の施策を展開する。一方で都市社会のなかにはそれ 点から中近世移行期の都市社会における秩序形成のしくみを考察 ンヘンを対象とし、 た問題関心から本論文では南ドイツ・バイエルンの領邦都市ミュ 秩序と都市住民の秩序の相互関係がどのようにつくられ、また 中 都市社会に良き規律と共通善を実現するためにポリツァイと 近世ヨーロッパの都市社会において、秩序はどのように維持 統治権力と共同体社会との相互関係という観 都市当局である参事会が担う自治は中世末

確立されることになる。

のであり、 すなわち参事会の自治行政は都市住民の合意を大きく欠いていた 占されほとんどの市民が政治参加から疎外されていたことである。 大きな問題は、 の求める秩序は、手工業組合や地縁団体など都市住民のさまざま これらの施策が都市社会に浸透していたとはいえない。都市当局 はじめ治安、 な都市騒擾が起こった。この反乱を経てミュンヘンの統治体制 な共同体の慣習や利害としばしば対立するものであったが、より またそのための行政組織を整えていった。しかし14世紀において 都市自治を発達させた。自治行政を担う参事会は、 13世紀末に都市法と自治特権を獲得したミュンヘンは、 門閥市民に対する不満が高まるなか、14世紀末に大き 建築、 自治機関である参事会が古くからの門閥市民に独 衛生、 風紀などに関する多くの法令を定め 経済・産業を 急速に

形成される余地が生まれた。こうして15世紀の間にミュンヘンのおする親方層であり、同業組合の代表職や都市官職を経て市政に参する親方層であり、同業組合の代表職や都市官職を経て市政に参加する道がより広い社会層に開かれていった。それだけでなく、加する道がより広い社会層に開かれていった。それだけでなく、加する道がより広い社会層に開かれていった。それだけでなく、加する道がより広い社会層に開かれていった。それだけでなく、加する道がよりになった。後島の大き職と知るでは、居酒屋を自営という都市自治の枠組みその形成される余地が生まれた。こうして15世紀の間にミュンヘンの形成される余地が生まれた。こうして15世紀の間にミュンヘンの形成される余地が生まれた。こうして15世紀の間にミュンヘンの形成される余地が生まれた。こうして15世紀の間にミュンヘンの形成される余地が生まれた。こうして15世紀の間にミュンヘンの形成される余地が生まれた。こうして15世紀の間にミュンへンの形成される余地が生まれた。こうして15世紀の間にミュンへンの形成される余地が生まれた。こうして15世紀の間にミュンへンの形成される余地が生まれた。

統治体制は、手工業親方ら市民上層を取り込むかたちで安定する またその過程で都市当局の秩序と民衆の秩序を相互に結びつける

回路も開かれていく。

たのである。 ションによって合意が調達されたかぎりにおいて実効性を持ちえ を示している。 容できる範囲において自分たちの秩序として受け入れていたこと 手工業者が参事会当局との交渉を通じて上からのポリツァイを許 工業組合の規約はしばしばポリツァイに関する条項を含んでおり 規約違反者に対して制裁を科す裁判権さえも行使した。一方で手 になったのにはそうした背景がある。手工業者の組合は集会を開 限されていた手工業者の組合が、15世紀以降広く認められるよう 織と活動を利用し、また頼る必要があった。14世紀には厳しく制 生きていたため、執行権力はなおも脆弱であった。それゆえ参事 民を出自とする者たちであり、規範の受け手である民衆の世界に いて自分たちの代表を選出し、 会当局はあるべき秩序を実現するために、都市住民の自律的な組 した。しかしながら実際に取り締まりにあたる治安役人は下層市 ながら、 組織化されていく。参事会は経済統制・産業振興を積極的に図り 都市当局の秩序=ポリツァイは15世紀以降、ますます厳格化 飲酒や賭博の規制といった民衆の風紀取り締まりを強化 統治権力の規範は都市住民との間のコミュニケー 共同の金庫を持って組合を運営し

> と和解が重視されていた。その意味で都市の公的司法も暴力の抑 脱を当事者の社会関係に配慮しつつ裁いており、制裁よりも仲裁 的コントロールが交差するなかに都市社会の現実における秩序が た一方、和解が容易に達せられない場合には都市裁判所の紛争調 れていたわけではない。裁判所は日常的な紛争や暴力、規範の逸 て捉えられているが、実際の裁判ではかならずしも厳格に適用さ ミュンヘンの諸法令において暴力の行使は基本的に「犯罪」とし 形成されるという認識は、司法の実践という面からも見て取れる。 ・コントロールにおいて都市住民の自律的な秩序に依拠してい このような、 統治権力の法的規範と都市住民の共同体的な社会

都市における秩序形成の特徴を見ることができる。 つの秩序規範の交わりとコンビネーションのなかに、この時期 むしろさまざまな回路を通じて相補的な関係にあった。異なる2 えていたために、 原理的には相容れないものだが、いずれもその実践には限界を抱 規律に価値を置く統治権力の規範は都市民衆の慣習的秩序とは 現実には両者はかならずしも排他的ではなく、

停機能は都市の秩序形成において一定の意味を持ちえた。

制

スは

日

] 口

ッパの代表的な観光国となった。そのなかで成長し、アルプス地域を中心に観光地を多数開発したスイ

ての転換期に、

宿泊業界の動向を中心に検討した。一九世紀から二〇世紀にかけ

一章では、スイスにおける「観光業」の形成過程について、

マス・ツーリズムをめぐる葛藤

――一九三〇年代スイス観光業の危機と再編―

森本慶太

本論文の目的は、スイスの観光業界が、二○世紀以降の大衆化に、観光業界が富裕層を対象にした従来の観光業のあり方に根本的な修正を迫られる、一九三○年代を主たる対象時期とした。 序章では、日本と欧米の観光史研究の動向を整理した。近年、ドイツをはじめとする欧米諸国の歴史学界では、「観光史」という分野が形成されつつあるが、世界各地で国家的課題となっている観光振興の歴史に焦点を当てた研究は、依然として少ないのが現状である。こうした研究状況を踏まえれば、現代世界の象徴的現象といえるマス・ツーリズムを受容・促進した観光業の歴史に焦点を当てることの必要性が理解できる。

定されており、観光業界全体を見渡したものではなかった。の実施を要求していく。しかし、その視野は宿泊業界の利害に限用した。さらに第一次大戦期以降、宿泊業界は連邦政府に支援策スイス国内博覧会(一九一四年)をそのアピールの舞台として活た宿泊業界は、観光業の地位向上をめざしていち早く組織化し、

一九三〇年代まで先送りされた。 一九三〇年代まで先送りされた。

に迫られていた。そのために観光業界は結集し、一九三二年にスー九三〇年代のスイス観光業は、世界恐慌を直接の引き金に、危機の時代を迎えた。外国人富裕層を主な客層として発展してきた機の時代を迎えた。外国人富裕層を主な客層として発展してきた機の時代を迎えた。外国人富裕層を主な客層として発展してきた。第三章では、スイス観光業の組織化とその影響を検討した。

さまざまな側面から、観光振興策を実行に移していった。観光業界の発言力強化をめざし、交通政策から教育政策にわたるイス観光連盟を設立した。観光連盟は、個別の業界利益を越えて

要課題として捉える契機となった。 要課題として捉える契機となった。 要課題として捉える契機となった。 要課題として捉える契機となった。 要課題として捉える契機となった。 要課題として捉える契機となった。

観光業界は、労使間の融和ムードやナショナリズムの高揚といっ年に設立した余暇・旅行団体、スイス旅行公庫協同組合(Reka)の歴史的意義を考察した。Rekaは、低所得者層に観光旅行の機会を提供する、「ソーシャル・ツーリズム」の先駆的試みとして会を提供する、「ソーシャル・ツーリズム」の先駆的試みとして会を提供する。「ソーシャル・ツーリズム」の先駆的試みとして会を提供する。しかし、観光業界の視点から検討すると、Rekaの設立過程には、観光業界の利益と矛盾しないよう腐と、Rekaの設立過程には、観光業界の利益と矛盾しないよう腐いする観光業界は、労使間の融和ムードやナショナリズムの高揚といっ

水準の観光と、より広範な社会層への旅行の普及を両立させる意ピールしたが、この団体が設立された背景には、富裕層向けの高た同時代の風潮と積極的に関わることで、Rekaの存在意義をア

図があったのである。

以上のように、本論文では、不可避となった観光の大衆化をどいように受容するのか、という問題に注目し、観光業界の動向にのように受容するのか、という問題に注目し、観光業界の動向に世紀後半以来の観光モデル、つまり外国人富裕層の旅行様式を前提とした高水準の観光の維持、という課題に直面した。業界は、同時期に起こりつつあった、社会的・経済的変動を視野に入れた。 「時期に起こりつつあった、社会的・経済的変動を視野に入れた。 「は、という問題に注目し、観光業界の動向に でス・ツーリズムへの対応であった。一九三〇年代の観光業界は、この マス・ツーリズムをめぐる葛藤を通じて、高水準の観光を維持す マス・ツーリズムをめぐる葛藤を通じて、高水準の観光を維持す

明治期の文芸作品における心霊学の影響

−漱石・鷗外の文芸作品を中心に ─

千慧

化がみられることが示されている。

莊

響の一端を、夏目漱石・森鷗外に関する考察を通して探るもので響の一端を、夏目漱石・森鷗外に関する考察を通して探るもので本論文は、明治期における心霊学の流行が文芸作品に与えた影

う言葉を題名に入れている。さらに 三遊亭円朝 え方の再編成にも影響を与えていた。たとえば、 Psychical Researchなどの影響を受け、霊の存在を検証するため 資料から窺える。一方、19世紀の後半から20世紀の初期までにヨー うものが否定的に捉えられる傾向が強かったことは同時代の文献 導入が日本に与えた影響は多様であり、怪異譚における怪異の捉 口 の科学的研究が明治20年代前後から日本に紹介されてきた。その た時、 うものは無い、 ッパ 江 戸時代末以降の日本において、 社会で盛んに言及されていたSpiritualism・Spiritism・ 当時の流行語であった「神經」をもじって「眞景」とい 『累ヶ淵後日の怪談』 全く神経病だ。 の速記録が明治20年代に発表さ (中略) 『眞景累ヶ淵』 〈不可思議な出来事〉 怪談は開化先生方はお 安政6年初演の では 「幽霊と とい

ている一方で、その語りはまぎれもなく開化の用語を流用し、変なタームが使われているように、怪異と開化が相反すると思われ態度に江戸との連続性が見られる一方で、「神経」という開化的嫌いなさる事でございます」という記述があり、怪異譚に対する

文芸作品に与えた影響について検討した。
文芸作品に与えた影響について検討した。
本鷗外の二人の作家を中心として心霊学が作家の認識及び当時の。その受容の諸相を解明する一環として、本論文は西洋での心る。その受容の諸相を解明する一環として、本論文は西洋での心る。その受容の諸相を解明する一環として、本論文は西洋での心霊学の流行を強く意識し、心霊学に関心を持っていた夏目漱石と霊学の流行を強く意識し、心霊学に関心を持っていた夏目漱石とない。

を探究するために心霊学・禅宗・心理学など多分野にわたる思想 という小説にも、当時の日本社会における、怪異に関する多様な 見解が凝縮されていることを指摘し、同作の再評価を試みた(第 見解が凝縮されていることを指摘し、同作の再評価を試みた(第 こ章)。漱石作品をめぐり、漱石の学知は国境を越え、死後の生 を探究するために心霊学・禅宗・心理学など多分野にわたる思想

うに、申請者は漱石という作家の持つ時代性及び世界観を新たなという従来見逃されてきた点を第三章において指摘した。このよの心霊研究・神智学・仏教復興運動などの動きとも類似しているのような多角的な探求が、同時代体系へ接近したことを明らかにし、彼の文芸観にも反映されてい

視点で再確認した。

理由と社会的流行との関連性について考察した。 そして第三章において、明治40年代の鷗外小説に見られる〈怪異〉 捉え方が窺えることを以上の考察により明らかにした(第二章)。 霊学の流行により、 学関連の書籍の多さを確認した (第一章)。そして、明治40年代 研究が流行していたことを視野に入れ、鷗外蔵書に見られる心霊 出された社会的背景として、ヨーロッパと日本で心霊主義・心霊 の捉え方に注目し、 にこれらの作品が鷗外により訳出・創作された背景に、当時の心 に刺激を与えたと考えられてきた。申請者はこれらの作品が生み して、従来は明治40年代に鷗外が翻訳した怪奇小説が、彼の創作 の関連性について考察する。森鷗外と明治期の心霊学の流行に関 そして、第二部では、 この時期に鷗外が怪奇的な題材を取り込んだ 「催眠術」などを導入し、新たな〈怪異〉の 森鷗外の作品と明治期の心霊学の流行と

識する明治の代表的作家の二人を通して、明治期における心霊学以上の考察から本研究では、明治期における心霊学の流行を認

え方に関して新たな挑戦を試みたことを明示した。の目を向けており、その学知を用いて文芸作品における怪異の捉が文壇に与えた影響の一端を探った。漱石と鷗外が心霊学に関心

谷崎潤一郎作品の研究

- 寓意としての母性をめぐって

麗静

張

た上で、彼の作品世界を論ずる必要がある。以下、本論の構成と 間にわたる創作時期は、まさに日本の女性史が西洋のフェミニズ 試みた。谷崎が明治四十三(一九一〇)年に作家としてデビュー 内の諸要素や、 めぐって――」と題し、従来の先行研究で見落とされてきた作品 心をよせている。そこで、谷崎の「女性崇拝」、「母性思慕」をテー 会の状況、 してから、生涯を閉じる昭和四十(一九六五)年までの五十六年 ことによって、谷崎作品における母そのものの持つ意味の究明を マとする作品を読解する際には、こうした点も十分に視野に入れ ムと共に、 本論文では、「谷崎潤一郎作品の研究 乃至は私生活に至るまで、谷崎は婦人問題に多大な関 独自の特徴を持って発展した時期と重なる。家系や社 作品周辺の言説とメディアとの関わりに着目する 寓意としての母性を

各章の概要を記す。

はなく、他者に依存しなくては存在し得ない悲劇性を持つ表象と 作は他者に依存しなくては存在し得ない、無力な母の生と死の物 摯に追慕する息子としての「私」がいる。そして考察の結果、 う認識を示す。その傍観者としての「私」がいる一方で、母を真 役を演じ、兄と母との間の悲劇が両者の思いの齟齬で生じたとい 寄せながらも、兄と母の葛藤を中心に語る構造を明らかにし、そ 語として読むことができた。そこでの母は、 た。そこで分かったことは、「私」が息子・傍観者という二重の おける母の境遇、さらに、 して、兄をはじめ私たち兄弟と母の関係、船の転覆事件の前後に 年三月))を取り上げ、まず、語り手である「私」が母に思いを して見て取れる。 第一章では、『不幸な母の話』 兄の遺書についてそれぞれ検討してき (『中央公論』、大正十 (一九二一) 単純に個体としてで 本

=理想の女性像を獲得し、新たな芸術世界への突入を表明する作性活と芸術の対立から抜け出し、「三味線」を弾いている〈母〉で指摘されてきた「母性思慕」という枠組みと異なる角度から分で指摘されてきた「母性思慕」という枠組みと異なる角度から分で指摘されてきた「母性思慕」という枠組みと異なる角度から分で指摘されてきた「母性思慕」という枠組みと異なる角度から分で指摘されている。

げられてこなかったが、『母を恋ふる記』を考察する上で看過で品であると読むことができる。これは、これまでの論では取り上

きない点であると考える

将滋幹の母』 析するものであった。それに対し、題材の一つである『今昔物語 上げた。これまでの関連する多くの論考は彼女の存在を、谷崎の 北の方の国経と時平への接し方を再検討した。これにより、 北の方と平中との「不義」を正当化する 作品の特徴とされる淫婦・悪女の問題という議論に引きつけて分 る立場を取るのではなく、 第四章では、 『少将滋幹の母』の「筆者」が付け加えた部分に着目して、 の「筆者」 『少将滋幹の母』に登場する北の方を中心に取 は、 同情心を持ち、 北の方の 「不義」をひたすら批判す 「筆者」の語りを起点に、 性愛を求める、ありふ

る既婚女性の〈姦通〉を描く小説群にとって画期的な意義を持つに関する作品にも通底していること、本作は、戦後の日本におけしてその点を、谷崎の他の〈不義〉への擁護は、谷崎の他の〈不義〉れた女の一面を提示しようとしていることが明らかとなった。それた女の一面を提示しようとしていることが明らかとなった。そ

ことを指摘した。

とを通して、 と二人のをんな』における庄造が「怠け者」として設定されるこ 係の様相を露わにしているのである。そして作者は、『猫と庄造 いくことで、女性優位の婚姻実態・母による過剰保護下の母子関 で『猫と庄造と二人のをんな』は構想され、一匹の猫を巡る登場 びている作品として読むことが可能となる。つまり、母性保護 作は、従来の枠組みを超えて、昭和十一年の時代色彩を濃厚に帯 七月号、昭和十一(一九三六)年)を捉え直した。その結果、 子という観点から、『猫と庄造と二人のをんな』(『改造』一月号・ 記事を手掛かりとし、 いは母性主導といった女権拡張の主張に対し、暗に批判を行って 人物の男女関係・母子関係のありふれた家庭内の軌轢を展開して 女権拡張といった婦人問題が叫ばれるようになった時代風潮の中 の母子関係における「しつかり者」の母親と「甲斐性のない」息 第五章では、 当時急激な高まりをみせた女性の経済的独立、 初出誌 働く妻と働かない夫の婚姻、 『改造』に見える婦人問題に関する当時の 庇護・被庇護 本

いると考えられる。

本近代文学作品における母性研究の一視点を提供するものである。以上より、谷崎の作品における母性問題についての議論や、谷崎自身の芸術観の確立と関わる存在であることが明らかとなった。「古なわち、谷崎作品における母は、谷崎の母性イデオロギーの価値転換をも寓意する側面を持っているのである。こうした側面は、日で、大正の大手をも実施がある。とが明らかとなった。の代日本の女性史を理解する上で重要な価値を持つと同時に、日本近代文学作品における母性研究の一視点を提供するものである。以上より、谷崎の作品における母性研究の一視点を提供するものである。

大江健三郎初期作品の研究――「学生もの」を中心に

泉

田

大学生の登場する作品を「学生もの」として規定し、これらの作などを経験してきた世代である。筆者は大江の初期作品においてなどを経験してきた世代である。筆者は大江自身と等身大のもい。これらの作品に描かれた大学生の登場しているものは少なくな初期の大江作品において大学生の登場しているものは少なくな

品を研究対象とする。そして、本論では、学生の登場する『奇妙品を研究対象とする。そして、本論では、学生の登場する『奇妙品を研究対象とする。そして、本論では、学生の登場していた。これらの作品と大江の他の作品及び同時代の作品とのかか時に、これらの作品と大江の他の作品及び同時代の作品とのかかわりについても考えてみたい。作品の詳細な読みの積み重ねによって、大江初期作品の「学生もの」の中で、そこに登場している学生がどのような役割を果たしているのかを見てみたい。各章の内容は以下の通りである。

第一章では『奇妙な仕事』に登場するアルバイトの学生を中心 第一章では『奇妙な仕事』に登場するアルバイトの経済的な ま情に目を向け、作品に登場する学生たちの犬を殺す仕事とのかかわりへの考察を通して、『奇妙な仕事』を一途に経済的利益を かという新たな読みを提示した。

照的に示されており、人間存在の不安定さを際だたせるものとしれている死者の「奢り」は、生きている人間の存在の窮屈さと対

て用いられていると考えられる

関係も示した。第三章では『偽証の時』を取り上げ、贋学生の監禁や偽証によの年で抑圧される異分子を描くものとして『偽証の時』を読んだ。中で抑圧される異分子を描くものとして『偽証の時』を読んだ。の中でではない本作品の同時代の作品及び大江の他の作品とのまた、論の中で、本作品の同時代の作品及び大江の他の作品とのまた、論の中で、本作品の同時代の作品及び大江の他の作品とのまた、論の中で、本作品の同時代の作品及び大江の他の作品との監禁や偽証によっ

第四章で取り上げた「見るまえに跳べ」では、「現実のなか」第四章で取り上げた「見るまえに跳べ」では、「罪をひらいて外へ出た」「ぼく」はこれから「跳がし、本論では「扉をひらいて外へ出た」「ぼく」はこれから「跳びし、本論では「扉をひらいて外へ出た」「ぼく」はこれから「跳びし、本論では「扉をひらいて外へ出た」「ぼく」はこれから「跳びし、下は、「現実のなか」第四章で取り上げた「見るまえに跳べ」では、「現実のなか」

人物のあり方に対する考察を通して、本作品のタイトルに提示さし、死者の「奢り」の意味について確認した。作中の三人の登場第二章では『死者の奢り』に描かれた死者と生者について考察

として捉え、この作品を「監禁」ではなく、「克服」を描いたもげた。本章では青年が報復する意志を放棄するまでを描いた作品第五章では単行本未収録作品である『報復する青年』を取り上

来の説は妥当性が欠けていると指摘し、新たな読みを提示した。導いたことに「説得力」がないとして作品を低く評価してきた従指摘や、閉じこもりという報復手段と、女の歌声が報復の放棄に指摘や、閉じこもりという報復手段と、女の歌声が報復の放棄にのとして読む。青年が報復を諦めるに至るまでの経緯への考察をのとして読む。青年が報復を諦めるに至るまでの経緯への考察を

えに跳べ」)、「現実世界から疎外され」る(『報復する青年』)学 らずなだらしない」(『偽証の時』)、「政治にも無関心、あとあと 持っていた感覚が感じられると共に、「政治をふくめてほとんど ものの不安定さを描いたもの、現実にかかわっていこうと「跳ぶ」 生を通しての社会批判、学生という存在のみならず人間存在その もの」において、戦後高度経済成長期を生きているアルバイト学 身の作品及び同時代の作品との関係性を示した。これらの「学生 ぞれの作品に対する読みを提示すると共に、個々の作品の大江自 の病気にも無関心、 (『奇妙な仕事』)、「希望を持っていない」(「死者の奢り」)、「恥知 あらゆることに熱中するには若すぎるか年をとりすぎていた_ 在が描かれている。それらを通して、一九五〇年代という時代が ことを試みる占領下の日本人青年、学生運動にかかわる学生の存 察において、作品に登場する大学生への考察を糸口として、それ 以上、大江初期作品における五つの「学生もの」についての老 恋人を見つけ出すことにも無関心」(「見るま

のである。生たたに対し、作者・大江は批判的な眼差しをこめて描いている

島崎藤村の身辺書き小説

- 〈個人〉から〈社会〉への回路

Holca Irina

本論では、作者自身及びその友人・家族をモデルとし、〈私小説〉本論では、作者自身及びその友人・家族をモデルとし、〈私小説〉としてのみ捉え、作品において表されている〈個人〉の実生活をたった。本論では、藤村という一個人をテクストの中に描き出され、そこで行われた文学的営みが〈内面の告白〉として評価されてきた。本論では、藤村という一個人をテクストの中に描き出された時代、あるいはテクストが発表された時代の一つの〈記号〉としてのみ捉え、作品において表されている〈個人〉の実生活をとしてのみ捉え、作品において表されている〈個人〉の実生活をとしてのみ捉え、作品において表されている〈個人〉の実生活をとしてのみ捉え、作品において表されている〈個人〉の実生活をとしてのみ捉え、作品において表されている〈個人〉の実生活をとしてのみ捉え、作品において表されている〈個人〉の実生活をあるいは〈自伝的人〉の表と、「本人」を

に焦点を当て、その形成過程において戦略的に使用されているいう叙述方法を視座に――」では、青木像(北村透谷がモデル)第一章「『春』における〈狂気〉のパラダイム――〈引用〉と

渡仏した主人公の岸本がフランス人女性と一緒に第一次世界大戦

る場 う側面が付加され、 引用・言及される文献の間に起こる「擦り合わせ」によって、 とされる岸本 シェークスピア『ハムレット』と透谷『人生に相渉るとは何の謂 のとして準備されていったと結論づけた。 治四〇年代の枠組みに属していた〈煩悶青年〉、 枠組みに連続させられて描かれているのに対し、青木の場合は といったフランスのゾライスム・日本の前期自然主義という からの引用や、 面に着目した。 (島崎藤村) 彼の 『春』では、 『我牢獄』が青木の夢として書き直されてい 〈狂気〉が〈予言者〉 の場合は、その症状が 同じ「狂じみたところがある」 のそれに重なるも 〈神経衰弱〉とい 〈遺伝〉 や〈性 明

た。

では された際に挿入された名取春仙による一一七枚の挿絵と本文の関 る回路を確立させながら、 視覚情報に置き換えることによって、作中人物の内面を可視化す わりに焦点を当てた。 アリズム――」でも 代 第三章では中編小説 第二章 その内容をスケッチ風やアル・ヌーヴォー風の挿絵といった を顧みるノスタルジックな語り手の眼差しをはじめ、 『春』の読みの可能性を示したことを本章で指摘した。 「新聞小説 と同じ青年男女の群像が描かれているが、「若い明治 『春』を取り上げ、「東京朝日新聞」に連載 『春』における挿絵の機能 春仙は『春』の文体の特質からヒントを得 『桜の美の熟する時』を分析した。本作品 モデルに収斂されないリアリズム小説 名取春仙のリ 「年

0)

機感や、 の実の熟する時』のスタイルと内容に及ぼした影響について論じ 況に深く関わっていると考えられる。本章では、 た文芸投稿雑誌「文章世界」の特質、 なる特徴をもっている。これらの特徴は、 ついて解釈を添えたりする語り手など、 若な読者」のために二〇年前の事情を説明したり、 たは大正民主主義や教養主義といったイデオロギー的体系が 当時図られていた作者と読者のヴァーチャルな接近、 他方で大正期という時代状 作品全体が 一方で発表媒体であっ 文壇ギルドの危 引用・言及に 『春』とは異 『桜 ま

据えていた当時の運動に対する本作品の批評性を明らかにした。 れていた 母性保護運動が行われつつあった大正期に発表されたこの作品は とした 妻の死後に四人の子供を一人で育てる男の話である。本章では 村自身も雑誌 『新生』 嵐 第五章は藤村の実生活上の一大スキャンダルの懺悔録を記した 第四章で取り扱った作品は作者藤村とその四人の子供をモデル 〈家族〉 における を考察の対象にした。 〈家族愛〉の物語として絶賛された中編 (母性) のあり様を指摘することによって、 『処女地』の刊行などを通して関わった女性解 〈時間〉 Þ 〈父性〉とは異なった構図と、構築物として の構造を分析し、 **姪節子との相姦から逃れるために** 大正期において唱えら 〈女性〉を中心に 『嵐』である。

るために支配者のディスコースを受け入れるといった戦争の構図のきた節子が実は岸本好みの女にしかなれず、被支配者が生き残舞いにも影響を与えている。さらに、「創作」を通して「独立」がきを示し、彼のアンビヴァレンスが帰国後の姪に対する振るがまできた節子が実は岸本好みの女にしかなれず、被支配者が生き残かいた戦争を体験しながら、〈脱男性化〉を図る。しかし同時に、下の銃後を体験しながら、〈脱男性化〉を図る。しかし同時に、

を反復していると指摘した。

論づけた。 論づけた。 論づけた。

研究に通じ得る、普遍的な事実の〈文学上の報告〉として再評価的領域〉への回路に着目することで、現在の日本内外の近代文学を見出した。藤村の身辺書き小説における〈私的領域〉から〈公以上のように、作者の身の回りから材を取った五つの作品を分以上のように、作者の身の回りから材を取った五つの作品を分

した。

志賀直哉の大正時代の作品研究

〈自己〉と〈他者〉を中心に

Mohammad Moinuddin

点から、志賀直哉の諸作品を読解しようとしたものである。本論は、志賀直哉の作品における〈自己〉と〈他者〉という観

認した。

認した。

認した。

認した。

認した。

記した。

記して、

本論で用いる

に描かれる登場

に描かれる

記した。

に描かれる

にはたい

本研究で取り上げている作品は、皆通常「私小説」と呼ばれる

向

れてきた。その 作品ばかりである。私小説は通常、 いるかという点に焦点をあてて分析を行った (自己) の物語の中でいかに 〈自己〉の概念とともに語ら 〈他者〉 が描かれて

以 後の事』や『流行感冒』は重要である。これら二つの作品では、『和 翌年は作品が激減しているが、この間発表された『十一月三日午 社から原稿料が出たはじめての作品、つまり出版の価値があると り上げられるであろう。これは 0) 月三日午後の事』、 の扱い方にも大きな違いが見られる。そこで、本論では、 はじめて認められたと言えるものである。 ている。その 前に発表された『大津順吉』と、『和解』以後に発表された『十 時期の作品と言えば、 『和解』 Þ 『大津順吉』と違った〈自己〉 は 「志賀直哉のイメージを形作った作品」と指摘され 『和解』より以前、特に三年間の沈黙期に入るまで 『流行感冒』をも取り上げている 『大津順吉』 「記念碑的」な作品であり、 が最も重要な作品として取 の捉え方があり、 『和解』 が発表された 『和解』 〈他者〉 出版

られた主人公の体験を完全に志賀の実体験に基づいたものとして .が見られる。 本論が対象とする作品について、多くの先行論では、 部分的に志賀の実体験と重ね合わせて考察するという傾 しかし、 いくつかの内容が作者の実生活と重なり 作中で語

> 作品そのものに焦点を絞って分析を行った。 を行っている。よって、第一章以降の各論においては、基本的に 本論では、 合っていたとしても、 作品を作品として純粋に分析するという立場から読解 作者=主人公と考える必要はないだろう。

の心理の動き方に着目して考察した。 0) 際の姿とに分けて行い、主に二人の女性、つまり、「貴族主義な女」 解するために、 苦しんでいる有様に焦点を当てた。また、「私」の心の変化を理 理性と、自分の中から生まれる青年らしい異性への欲求の狭間で キリスト教に入信した「私」が姦淫を禁じる教えに従おうとする の描かれ方を中心にして論じてゆくが、特に「U先生」の影響で 「娘」や「女中」の千代と関わっていくことにより変貌する「私 一章「『大津順吉』 論考を「私」が理想とする自分の姿と「私」の実 論 「私」をめぐって――」では、「私

父子間の問題と「自分」 想家」を書こうとする「自分」の努力などに焦点を当てながら、 さらに、 その根本原因を探った。この不仲の関係を作品化しようとして「夢 では、『和解』における「自分」の父との不仲の関係を中心に論じ、 第二章 周囲の人々、特に友人達との関係において「自分」が調 「『和解』における の創作活動との関わりについて考えた。 〈自己〉 ・父子関係を中心に

関係性について考察を行い、本作品における〈自己〉について分品を元にした文章「或る親子」と「自分」の調和的な考え方との和的になる過程を検討した。また、ある「郵便局員の書いた」作

れる作品、『十一月三日午後の事』と『流行感冒』を取り上げた。手である主人公による他の登場人物に対する気遣いや配慮が見ら第三章と第四章では、『大津順吉』や『和解』と違って、語り

第三章「『十一月三日午後の事』論――〈他者〉への視点をめぐって――」では、先行研究に多い、反軍国主義という観点からの本作品の分析について触れた後、主人公が従弟と共に散歩に出かける前の、不快な天気や気に障る蜂などという外界の刺激に焦点を当てて、考察を行った。次に、鴨を買いに行く途中や手に入れた後に軍隊の演習を見かけた時の「自分」の心理について分析した。そして、帰り道で「一年志願兵」の惨めな状態に遭遇し、その状そして、帰り道で「一年志願兵」の惨めな状態に遭遇し、その状況やその後に出遭った兵隊たちの様子を目にして影響される「自分」の心理を明らかにした。これらの事象から、本作品における〈他者〉について検討を行った。

第四章「『流行感冒』論――〈自己〉と〈他者〉を中心に――」

ある。

では、〈上〉〈下〉二つに分けられている『流行感冒』において、「女中」の石は主人公の注意を引く重要な登場人物として描かれていると位置付けた。〈上〉において、石は「私」にとって疑惑を抱かせる人物となり、〈下〉において、石は「私」の信頼を勝ち取っている。このように、作品の始まる頃の「私」と終る時の「私」のの養育に神経質になっているが、その後は、以前「私」自身が疑惑の目を向けていた石にも配慮し、家族の一員のように見るまでになる。そこで、本章では「私」の心理を中心に考察を行った。になる。そこで、本章では「私」の心理を中心に考察を行った。され、「私」の決意に影響を与える妻を取り上げた後、「私」によった。る石に対する捉え方の変化に注目しながら、本作品における〈自る石に対する捉え方の変化に注目しながら、本作品における〈自る石に対する捉え方の変化に注目しながら、本作品における〈自る石に対する捉え方の変化に注目しながら、本作品における〈自る石に対する捉え方の変化に注目しながら、本作品における〈自る石に対する捉え方の変化に注目しながら、本作品における〈自る石に対する捉え方の変化に注目しながら、本作品における〈自ると、上、「私」というによりない。

堀田善衞と中国

- 「上海体験」に始まる初期作品の形成と展開 -

嵥

曽

関わりを、彼の初期作品を分析することによって考察するもので本論文は、堀田善衞(一九一八~九八)と中国、殊に上海との

そのため、本論では戦後作家・堀田の形成と中国との関わりを、「上 国人とはどのような交渉があったのか。また、これは堀田の戦後 に統一する)とは具体的にどのようなものだったのだろうか、 あるいは 中 ける上海の「敗戦体験」という点を強調する。この上海での体験 海体験」と初期の文学作品との関わりから論じる がどのように影響を与えたのか、 反安保条約運動、 の文学とどのように関係しているだろうか。さらに、それ以降に 五は、「上海における敗戦体験(一九四五・三・二四~一九四六・ うに堀田の上海体験を評価してきたことに由来している。本多秋 いだろう。では、堀田の作家となる条件を決めた「上海での生活 自らが重要なものであると繰り返し語り、また批評家らもそのよ ・国との関りが、 本論が、このような問題を設定するのは、 反核運動など社会活動に身を投じた堀田にこうした上海体験 「外地体験」あるいは「敗戦体験」(以下は「上海体験(2 が、 堀田善衞の文学を決定した」と堀田の文学にお 戦後、 反帝国・反植民地運動、 作家となる堀田の出発点だと考えてもよ などの疑問が浮び上がってくる。 中国との国交正常化運 上海での体験を堀田 中

じる。堀田「西行」は、先行する小林秀雄「西行」と驚くほど類を確認する。続いて、彼の古典評論「西行」を特に取り上げて論時系列に沿って再読し、堀田が自己を確立しようと苦心する過程等一章では、まず、雑誌『批評』に掲載された評論・エッセイを、

との関係に着目して、

作品の全体構造を明らかにした上で、

て位置付けられている先行研究に対して、本章は木垣と他の人物

を取り上げ、「占領」

第三章では、堀田の戦後文学の出発点を象徴する「広場の孤独

状態に対する知識人の苦悩を表す作品とし

な読みを提示する。

結論から言うと、

複雑な社会状況の下で様

点を参照して、「武力」より「心と心」の問題と「人性の問題 り、また中国の中央宣伝部に「留用」して中国政策の宣伝者となっ 文化宣伝者として上海に渡った。その後、 場に沿いながら文学活動を行なっていた堀田の姿を確認する 似している。 いう新たな認識を獲得した。その上で、中国人作家・林語堂の観 や公式機関に属しない一個の人間として生きなければならないと 宣伝部など公式機関には人間性がないと感じるようになり、国 た。このような「身分転換」によって、 て、 ていた堀田は、『日華文化交換論文集』創刊のため、帝国日本の を及ぼした要因だと分析する。戦争末期、 を重んじて国際問題を解決すべきだとする堀田の主張は、 人間性を尊重して守るという認識に基づいていることを分析する。 『批評』同人たちの影響を受け、 第二章では、 彼は帝国日本の文化宣伝者から一般の 最後に、 上海での「身分転換」が堀田の認識に大きな変化 河上徹太郎の文化復興論も交叉させて論じ、 上海へ赴く以前、 堀田が日本の軍部や中 日本の「敗戦」によっ 国際文化振興会に勤め 「敗戦国」 帝国日本の立 の国民とな 自他の 国

間になるという上海時代以来の作家の意志の投影があったと考え表明する木垣という人物像に、国家・組織を抜け出して一個の人な試行錯誤を体験しながら、「戦乱や革命」に参加しない意志を

られる

 第四章では、堀田の思考とその思考を文学化する創作手法 定説に対して、堀田の初期の代表作「祖国喪失」と「広場の孤独」 とを取り上げ、両作品のキーワード「共犯」と「コミットメント」 とを取り上げ、両作品のキーワード「共犯」と「コミットメント」 を通じて、相似する人物構造と人物の特徴を考察する。その上で、 そのキーワードに託した堀田の意図を明らかにし、小説家として の出発点において、堀田初期文学のテーマを、「現代政治というメカ 第四章では、堀田初期文学のテーマを、「現代政治というメカ

説の時間を具体的に分析することにより、堀田が「歴史」でどの がら具体的に考察する。 の導入、小説における時間の操作を、茅盾の『子夜』と比較しな 家と見なしたことを確認する。 の接触から、 である茅盾の『子夜』と比較する方法を採る。まず、堀田と茅盾 堀田文学と中国文学の関係を強調するため、 を如何に小説に書き込むのか、 第五章では、 堀田が茅盾を巧みな手法を使って社会小説を書く作 堀田の長篇小説「歴史」を取り上げ、社会の全体 このように全体構造、 その後、小説の全体構造、 その小説手法を論証する。その際 中国リアリズム作家 小説の導入部、 冒頭部

なく、「祖国喪失」や「広場の孤独」と作風が異なる理由を提示ような手法を使って社会全体を描いたかを明らかにしただけでは

することができる

関わる要素は、無視できない大きな比重を占めていることを検証には、日中戦争、上海での実体験、中国作家の影響など、中国とと展開を考察した。作家としての出発点に立つ時期の堀田の文学と展開を考察した。作家としての出発点に立つ時期の堀田の文学と展開を考察した。

注

した。

一九六二・三・一九、引用は『本多秋五全集』第七巻、菁杮堂(1) 本多秋五「国際関係に眼を開く堀田善衞」(『週刊読書人』

九九五・八、五二六頁に拠る)。

(2)「上海体験」は一九四五年三月二四日から一九四七年十二月二十八日(日本に上陸したのは一九四七年一月七日)までの出田の上海での体験を指している。花森重行「歴史に抗する本学報」、二〇〇三:三)では、「上海体験」の語を括弧つき本学報」、二〇〇三:三)では、「上海体験」の語を括弧つき本学報」、二〇〇三:三)では、「上海体験」の語を括弧つき本学報」、二〇〇三:三)では、「上海体験」の語を括弧つき、では書いてはいないが、その意義全体を再考する本論では、「お弧を使用する。

日本語拗音節の研究ローマ字本キリシタン資料に基づく

竹 村 明日香

本研究は、ローマ字本キリシタン資料に見える日本語拗音節の本研究は、ローマ字本キリシタン資料に見える日本語拗音節の差に基づいて生じていることを明らかにし、この規則性によっの差に基づいて生じていることを明らかにし、この規則性によっの差に基づいて生じていることを明らかにし、この規則性によっの差に基づいて生じていることを明らかにし、この規則性によって中近世日本語での硬口蓋化の関わる諸現象が体系的に把握できることを指摘した。

本論文は、以下の通り、二部立ての全七章で構成されている。本論文は、以下の通り、二部立ての全でで構成されている。本論文は、以下の通り、二部立ての全七章で構成されている。本論文は、以下の通り、二部立ての全七章で構成されている。本論文は、以下の通り、二部立ての全七章で構成されている。本論文は、以下の通り、二部立ての全七章で構成されている。本論文は、以下の通り、二部立ての全七章で構成されている。本論文は、以下の通り、二部立ての全七章で構成されている。本論文は、以下の通り、二部立ての全七章で構成されている。

全硬口蓋化は唇音・軟口蓋音・rの歯茎音に生じる傾向にあるこ現代標準日本語では完全硬口蓋化はr以外の歯茎音に生じ、不完

とを指摘した。

別のない自由異音としての差であるため、 声差があることを指摘した。しかし両者間の音声差は、音韻的 証した。さらに『日葡辞書』の内部徴証からもーioとーeoには音 にiとeを表記上交替させただけの同音異表記ではないことを立 声的要因 資料全体において確認できるものである。よってーioとーeoは音 布が存在することを明らかにした。すなわち異例表記のーeoは不 を生じる子音の音節には出現しない。またこの傾向はキリシタン 完全硬口蓋化を生じる子音の音節には出現するが、 られる二様の表記ーiŏとーeŏ 表記には反映されていないことも述べた。 分類し、これらには硬口蓋化二種の別に対応した遍在的な表記分 第二章では、 (=硬口蓋化)を基盤にして生じたものであり、 キリシタン資料の開拗長音 (例:biŏ、beŏ)を音節頭子音別に 日本語母語話者の仮名 (開音の拗長音) に見 完全硬口蓋化

すると共に、これら二表記にも硬口蓋化二種の別に対応した表記ーe6は工段音、ーi6はイ段音に聞こえていた音節であることを証音声差があることを指摘した。『日本大文典』等の諸記述から、第三章では、キリシタン資料の合拗長音(合音の拗長音)にみ第三章では、キリシタン資料の合拗長音(合音の拗長音)にみ

遅れ、歯茎音ではいち早く進行していた可能性があることを抄物あることを明らかにした。合拗長音は /eu/ という連母音が拗あることを明らかにした。合拗長音は /eu/ という連母音が拗かが現れること、またそれらは開拗長音の表記分布と平行的で

の資料なども用いつつ指摘した。

資料から示した。

る硬口蓋化の関わる諸現象にも現れていることを指摘した。 本でも同様に確認できることを指摘した。刊本と写本での結果が 一致することにより、キリシタン資料の拗音節表記が硬口蓋化と いう音声的要因に基づいていることをより一層強固に裏付けた。 続く第Ⅱ部では、第Ⅰ部のキリシタン資料で確認されたような では、第Ⅰ部のイ列・エ列といった上代~近世におけ では、第Ⅰ部のイ列・エ列といった上代~近世におけ では、第Ⅰ部のイ列・エ列といった上代~近世におけ では、第Ⅰ部のイ列・エ列といった上代~近世におけ では、第Ⅰ部のイ列・エ列といった上代~近世におけ では、第一部のイ列・エ列といった上代~近世におけ では、第二部では、第Ⅰ部のイ列・エ列といった上代~近世におけ では、第二部では、第Ⅰ部のイ列・エ列といった上代~近世におけ では、第二部では、第Ⅰ部のイ列・エ列といった上代~近世におけ では、第二部では、第Ⅰ部のイ列・エ列といった上代~近世におけ では、第二部では、第Ⅰ部のイ列・エ列といった上代~近世におけ では、第三部のイ列・エ列といった上代~近世におけ では、第二部のイ列・エ列といった上代~近世におけ では、第二部のイ列・エ列といった上代~近世におけ では、第二部のイ列・エ列といった上代~近世におけ を見ることを指摘した。刊本と写本での結果が のは、第二部の本は、第二部の本は、第二部の本に、第二部部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部部の本に、第二部部の本に、第二記述の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二部の本に、第二記述の本に、第二部の本に、第二記述の本に、第二記述の本に、第二部の本に、第二記述の本に、第二語の本に、第二記述の本に、第二部の本に、第

表記ではないーeô、に焦点を当て、これらは「deô(出う)」のよれたかという点を再検討するため、近世~現代九州方言における工段音節を観察した。結果、工段音節での硬口蓋化は、子音の調音点の差によって様相が二分していること、またその二分は完全硬口蓋化と不完全硬口蓋化の別に対応していることを明らかにした。第五章では、中世日本語の工段音節で硬口蓋化がいかに生じて第五章では、中世日本語の工段音節で硬口蓋化がいかに生じて

口蓋化という音声現象が関与していた可能性があることを近世期形の助動詞ヨウ(例:食べヨウ)が新たに生じた過程では、脱硬動詞ウ・ウズル」の変遷についても追究し、下二段動詞で非拗音の法が多いことから、語幹を保持

記手法の点における共通点も関わっていることを述べた。記手法の点における共通点も関わっていることを述べた。記手法の点における共通点も関わっていることをが近似していることも指摘し、この共通点が生じた要因は、硬口が近似していることも指摘し、この共通点が生じた要因は、硬口が近似していることも指摘し、この共通点が生じた要因は、硬口が近似していることも指摘し、この共通点が生じた要因は、硬口が近似していることも指摘し、この共通点が生じた。動機と表語を決していることを述べた。

に把握できることを示した。
従来別個に論じられてきた日本語音韻史における諸現象が体系的の調音点に強い相関性があること、また、それらの把握によって、以上の検討を通して、日本語拗音節では硬口蓋化の二種と子音

一章では、受動文の統語構造について考察した。受動文と非

じような構造であると仮定すれば、どのようにして内項が主語位

した構造であると考えられる。

受動文の構造が他動詞能動文と同

The Syntax of Passive Constructions

(受動文の統語論研究

本 田 隆 裕

語

されるため主語位置に繰り上がる構文であると考えられてきた。 文とは、 動文の統語構造を分析したものである。先行研究において、受動 がどのように派生されるかを説明することである 文の目的は、 れる例が存在し、このような説明には問題があると言える。本論 しかし、第二章で見るように、実際には受動文でも対格が付与さ イディオムの受動文、 説明が可能な受動文の統語構造を提案し、その構造に基づいて、 本論文は、 動詞から対格を付与されなくなった目的語が主格を付与 第二章において対格が付与される受動文についても 生成文法理論のMinimalist Programの枠組みで、 擬似受動文、 知覚動詞・使役動詞の受動文 受

現象を紹介した。 により派生されることを確認した上で、受動文における内項の主 語位置への移動について概観し、第二章から第五章で取り上げる 第一章では、受動化は単なる語彙的な操作ではなく統語的操作

> また、受動文は理由節との共起が可能であることが知られている。 文では対格を付与された項が主語位置に移動していることから、 り上げ構文の受動文でも構造的対格の付与が見られる。 与するというHiraiwa(二〇〇八) 的語構文を分析すれば、受動文において構造的対格が付与されて になることができる。また、遊離数量詞を用いて日本語の二重 存在するためであり、 これは、 受動文においても対格が付与されているとする分析が支持される。 Lavine and Freidin(二〇〇二)によれば、ウクライナ語の受動 いることが分かる。さらに、二重対格制約は構造的対格にのみ関 目的語構文は間接目的語だけでなく、直接目的語も受動文の主語 いると提案した。ノルウェー語と英語の一部の方言における二重 することにより、受動文は非対格動詞文とは異なる構造になって 文の受動文に見られる対格は構造的対格であるということを指摘 あると主張されている。本章では、この主張に対し、英語、 Chomsky(二〇〇一)などでは、どちらの構文の構造も同じで 対格動詞文においては構造的対格が付与されないという観察から、 ノルウェー語の二重目的語構文や日本語の所有者繰り上げ 非対格動詞文とは異なり受動文には外項が暗黙項として 受動文の構造はむしろ他動詞能動文に類似 の観察に基づけば、 所有者繰 加えて、 日本 構

置まで移動するのかという疑問が生じるが、本章では、受動文に

おいて内項が主語位置に移動する前に一旦外項の上の位置に移動するというMatsuoka(二〇〇三)の提案を採用した。Matsuoka自身は日本語受動文においてニョッテ句が項として現れることを説明するためにこのような提案を行ったのであるが、本章はこの主張を受動文における対格付与を説明するために応用した。この主張を受動文における対格付与を説明するために応用した。この主張を受動文においては、受動文の主語になる項以外の項が元位置に残ることから、この他、英語受動文においてbe動詞が現れる理由やhave受動文についても議論した。

第三章では、日本語と英語におけるイディオムの受動化についてType Iとし、イディオム解釈と文字通りの解釈の両方が可能であるイディオムをType IIとして、イディオムを二つのタイプにあるイディオムをType IIとして、イディオムを二つのタイプにあるイディオムを可能では、一義的な解釈しか持たないイディオムをお類した。本章では、一義的な解釈しか持たないイディオムをも説明した。

と前置詞が「再分析」により一つの複合動詞となることで派生さの派生について議論した。先行研究において、擬似受動文は動詞第四章では、前置詞の目的語が受動文の主語になる擬似受動文

主張し、再分析を仮定しない擬似受動文の派生を提案した。 る。例えば、insistという動詞についてはthat節を補部に取る場合、 能動文では前置詞onが現れないが、受動文では逆にonが現れな 能動文では前置詞onが現れないが、受動文では逆にonが現れな には説明できない。そこで、前置詞は対格を付与する他動詞や主 格を付与する時制とは異なる方法で名詞句に格を付与していると 格を付与する時制とは異なる方法で名詞句に格を付与していると

した別の構造を持っていると提案した。 と言われている。これに対し、両者の間に能動文・受動文の関係と言われている。これに対し、両者の間に能動文・受動文の関係と言われている。これに対し、両者の間に能動文・受動文の関係の形不定詞節を補部に取る、受動文ではto不定詞節を補部に取る受動化を取り上げた。学校文法では、これらの動詞は能動文では

第五章では、原形不定詞節を補部に取る知覚動詞・使役動詞の

第六章は、結語である。

The Syntax and Semantics of Clausal Comparative Constructions

(節比較構文の統語と意味)

吉 本 真由美

かにし、

先行研究の問題点を指摘する。

する。 する。 本論文は、英語と日本語の節比較構文とは、thanやasに後解釈プロセスについて議論する。節比較構文とは、thanやasに後解釈プロセスについて議論する。

 (\neg) a. John invited more men than Bill invited.

要素の省略が見られるとされ、(1a) の場合はinvitedの目的語が、一般的にthanに後続する節(これを比較節とする)には何らかの一般的にthan にした。

(1b) の場合は主節のmoreに相当する要素がそれに相当する(年)の場合は主節のmoreに相当する要素がそれに相当する(本語におけるOCとSCの統語構造と意味解釈プロセスを解明する本語におけるOCとSCの統語構造と意味解釈プロセスを解明する

第1章では、英語の節比較構文に関する先行研究を検討する。

も生じる。本章では、OCとSCに見られる共通点と相違点を明らの特徴を完全に捉えることができないだけでなく、理論的な問題構造が提案されてきた。しかし、このような分析では、OCとSCの統語的相違点に基づきこれらの統語

れる。 していることを提案する。この提案は、SCのDegPが形容詞とし CP指定部に移動し、(1b) のようなSCではDegPのみが目的語の 異なった位置から非顕在的な空演算子 て生起しながら副詞的な役割を果たすという事実からも裏付けら いるのではなく、 そこで本論文では、 触するような移動を想定しているという新たな問題に直面する。 分析は、SCのDegPの移動において、Left Branch Conditionに抵 第1章で見たOCとSCの統語的特徴が捉えられる。しかし、この 名詞句内からCP指定部に移動すると提案する。これによって、 ようなOCではこのDegPが目的語の位置から名詞句全体を伴って DegP)の移動が見られることを提案する。具体的には、 第2章では、 先行分析の代替案として、OCとSCの比較節内で 動詞句を修飾する副詞の生起する位置から移動 SCにおいて、名詞句内からDegPが移動して (Degree Phrase 以下

意味解釈プロセスを探る。具体的には、Kennedy(1999)の提第3章では、第2章で構築した統語的構造に基づき比較構文の

定の元した統語構造に即した意味解釈プロセスを構築するだけでな家する「測量関数分析」に修正を加えることでOCとSCの解釈方案する「測量関数をその意味に含んでいる。測量関数とは、段階形容詞のもつスケール構造に、叙述される個体を写像し、その個体がどの程度その形容詞のもつ段階性を有するか、その「度合い」を定める役割を持つものである。この測量関数を用いた節比較構文ががでは、主節に存在する段階形容詞と比較節に非顕在的に存在する段階形容詞が、それぞれの節で「度合い」を出し、その程度差を比較するという構造が示される。本論文では、このような測量関数分析の利点を提示し、OCとSCの統語的特徴と意味的特徴を考察した上で、SCでは「個体」に写像するのではなく動詞句の示す「イベント」に写像すると提案する。これにより、第2章の示す「イベント」に写像すると提案する。これにより、第2章の示す「イベント」に写像すると提案する。これにより、第2章の示す「イベント」に写像すると提案する。これにより、第2章の示す「イベント」に写像すると提案する。これにより、第2章の示す「イベント」に写像すると提案する。これにより、第2章の示す「イベント」に写像すると提案する。これにより、第2章の示す「利力を表するだけでなので示した統語構造に即した意味解プロセスを構築するだけでなを考察した。

語と同様に「節」構造を成していると主張する。そして、日本語の比較構文の先行研究では、日本語の比較節は外見では「節」の構造を成との先行研究では、日本語の比較節は外見では「節」の構造を成いる。本論文では、様々な節比較構文の統語的特徴と意味的特徴を観察することにより、日本語の比較節は「名詞句」である、とされている。本論文では、様々な節比較構文を考察する。まず、日本語の第4章では、日本語の節比較構文を考察する。まず、日本語の第4章では、日本語の節比較構文を考察する。そして、日本語の第4章では、日本語の節比較構文を考察する。そして、日本語の第4章では、日本語の節比較構文を考察する。そして、日本語の第4章では、日本語の節は対象する。

く、SCの容認性条件を捉えることも可能となる。

わち、非顕在的な段階形容詞が存在することを提案する。の比較節でも比較の「度合い」を返す関数が存在すること、すな

後の研究の展開について言及する。 性に関与している。ここではSCを3つのタイプに分け、それぞ 体」に対する「度合い」として解釈できるかどうかが、その容認 SCでは、測量関数が「イベント」に写像して出た「度合い」が、「個 統語的派生に従った意味解釈プロセスを構築する。最後に、この すると主張する。そして、段階形容詞のもつ測量関数や非顕在的 語と同様に、DegPが目的語位置に基底生成され、その位置から 指摘する。次に、この事実から、日本語のOCの比較節でも、英 容認性にはDegPと動詞句の結びつきは関わらないという事実を 統語構造と意味解釈プロセスを提案する。まず、日本語のSCの れの容認性条件について提示する。第6章では本論文の結論と今 提案に従って日本語のOCとSCの容認性条件を考察する。 に存在する比較形態素の意味を提示し、それにより右記のような る位置に基底生成され、その位置からCP指定部に顕在的に移動 CP指定部に顕在的に移動する一方、SCではDegPが副詞の生起す 容認性にはDegPと動詞句の意味的な結びつきが関わるが、OCの 第5章は、 第4章の提案に従い、非顕在的な段階形容詞を含む

日本語学校で働く教師たちとのナラティヴ的探究

――教師の悩みからわかること -

末吉朋美

た。 師たちが孤独なまま悩みを抱えている現状を憂いてきた。 ことである。著者 加者である教師たちにどのような効果を与えるかを明らかにする 互いに語り合える場を設ければ、 修士論文の研究時の経験と大学院で受けた授業から、 日本語学校での経験から、 い効果が得られるのではないかと考え、実践研究を行うことにし 本論の目的は、 教師同士が (以後「私」という一人称を使う) は、 日本語教育の現場において、 「語りの場」で語り合うことで、 悩みを解決していけるような良 教師同士が 日本語教 自身の 自らの 参

研究方法はClandinin and Connelly (2000) などによって提唱されているNarrative Inquiry (ナラティヴ的探究。以後「NI」されているNarrative Inquiry (ナラティヴ的探究。以後「NI」とする)を用いた。本研究の協力者の教師たちは、Jさん、Pさん、Uさんの3人であり、いずれも私と同じ日本語学校に勤めるん、Uさんの3人であり、いずれも私と同じ日本語学校に勤める人であり、20代後半から30代前半の、日本語教師歴3年ともが独身であり、20代後半から30代前半の、日本語教師歴3年ともが独身であり、20代後半から30代前半の、日本語教師歴3年ともが独身であり、20代後半から30代前半の、日本語教師歴3年ともが独身であり、20代後半から30代前半の、日本語教師歴3年ともが独身であり、20代後半から30代前半の、日本語教師歴3年ともが独身であり、20代後半から30代前半の、日本語教師歴3年ともが独身であり、20代後半から30代前半の、日本語教師歴3年ともが独身であり、20代後半から30代前半の、日本語教師歴3年ともが独身であり、20代後半から30代前半の、日本語教師を3年ともの場合によります。

半から2時間ほどであった。 半から2時間ほどであった。 本と3人の協力者たちは、職場から7年の非常勤講師であった。私と3人の協力者たちは、職場から7年の非常勤講師であった。私と3人の協力者たちは、職場から7年の非常勤講師であった。私と3人の協力者たちは、職場から7年の非常勤講師であった。私と3人の協力者たちは、職場から7年の非常勤講師であった。

向けて取り組んでいく様子が見られるようになったが、会の後半 ら時間的な制約への考慮が必要であったこと、また、参加した4 囲の理解を得ることの困難さ、そして、非常勤講師であることか Uさんが同僚教師たちから経済的な状況を非難された出来事は はそれまでとは流れを変えてしまった。その後、 では、ベテラン先輩教師の助言や私の提案からの影響により、 た。 できたことなどが挙げられた。問題点としては、 たこと、話し合う中で自分を見つめ直す機会や仲間を得ることが 交換ができたことや愚痴を話し合ってすっきりとした気分になれ 会を続けようとする意欲を彼女から奪い、そのことが会の存続に 人の関係作りのために工夫や努力が必要であったことが挙げられ 本研究の結果、「語りの場」の効果としては、 会の前半では、 4人が話し合う中で徐々に自分の問題解決に 場所の確保や周 役に立つ情報 正月休みの間に

も大きく関わったと思われる。

役割の意識の強い社会であることが大きく影響し、話し合うだけ 地位の低さについての悩みには、日本が他の先進国と比べて性別 根源を理解したことで、 観や、大学や留学先での「被教育体験」から影響を受けた「言語 その教師像や学生像は、 得ることに困難を感じたために生じたものであることがわかった。 悩みが、それぞれに理想として求めた教師像や学生像を現実的に ビューでは、会で話した各自の悩みについて、過去をさかのぼる 会から様々な影響を受けて変化したことがわかった。インタ ぞれに会の役割の変化や意味の変化が起こっていたことがわかっ で解決するのは難しいことがわかった しかしその一方で、彼女らの日本語教師の仕事の経済面や社会的 教育観」が反映されたものであった。協力者たちは自分の悩みの ことでその悩みの根源を探った。その結果、3人の協力者たちの た。また、会後の個別インタビューでは、協力者たちもそれぞれ 部や内部の影響を様々な形で受けた後半部分とに分けられ、それ 分析により、 会は独自に大きな変化を起こした前半部分と、外 悩みを克服する方向へ進むことができた。 大学や養成講座の授業などの周囲の価値

大きいことがわかる。これはつまり、教師の悩みを理解するための中だけで生じているのではなく、実践の外からの影響が非常にこのように、3人の協力者の悩みを見ていくと、教室での実践

する必要があることを示唆していると言えよう。

には教師個人のこれまでの経験や生きている社会そのものを理解

本研究では、教師の語りの場のみで3人の協力者の悩みを解決することはできなかったが、その後の私との個別インタビューにおいて過去を振り返ることで悩みの根源を見つけ出し、ある程度おいて過去を振り返ることで悩みの根源を見つけ出し、ある程度おいて過去を振り返ることで悩みの根源を見つけ出し、ある程度おいて過去をおす」という「ナラティブ的探究の4つの重要な過程」において、インタビューで私が「交渉」を行って初めて、「語りなおす、生きなおす」という探究の段階に入ったことを表している。これは、教師同士の語りの場のみで3人の協力者の悩みを解決することはできなかったが、その後の私との個別インタビューにすることはできない。

本研究の教師同士の「語りの場」である会において、協力者たちの悩みを解決するまでは行かなかったものの、本研究の実践のい、悩みの背景にある出来事を自己理解し、個々の教師が自らのい、悩みの背景にある出来事を自己理解し、個々の教師が自らのい。べいでいいけるのであれば、今後の教育現場において、教師同士が語り合う場を設けることは大変意義のあることだと思われる。そして、今後教師同士の語りの場を広めていく際、どのよれる。そして、今後教師同士の語りの場を広めていく際、どのよれる。そして、今後教師同士の語りの場を広めていくことが重要なれる。そして、今後教師同士の語りの場となるだろう。

その芸術学的射程中世和歌における古歌再利用意識の展開と

田 耕 督

土

中世和歌の世界は、過去と不即不離の関係性の中ではじめて成立する。歌人たちは、指標とする過去からの距離を測定することによって、自らの生きる時代の位相を見定め、過去に詠まれた歌を常に基点としながら、新しく詠まれた歌の価値を判断していた。そこでは当然、古歌を何らかのかたちで自らの詠歌に再利用するという行為が、積極的に遂行されることになる。この方法論の総体こそ、今日「本歌取」という用語をもって把握されるものである。

践を抜き出して、それに最高の価値を与え、そこから他の方法論究成果は、中世和歌における古歌再利用の総体を捉えきれていない。なぜならそれらの言説は、多面的な様相を呈する方法論、及い。なぜならそれらの言説は、多面的な様相を呈する方法論、及た視点から、一元的に把握してしまっていると考えられるからでた視点から、一元的に把握してしまっていると考えられるからでた視点から、一元的に把握してしまっていると考えられるからでた視点から、一元的に把握してしまっていると考えられるからである。すなわち、藤原定家(1162-1241)という歌人の理論と実施を抜き出して、それに最高の価値を与え、そこから他の方法論のでは、中世和歌に対している。

と表現意識の価値を測るという視点である。

今日の「本歌取」に対する認識は、 歌研究も、 歌論書や注釈書は、 する総括的分類と価値序列は、 それにもっとも高い価値を認めている。種々の古歌再利用法に対 れないという二重の問題点を指摘することができる。 る古歌再利用の実相は、「本歌取」という概念のみでは説明しき て代表されるものではなく、定家の実践を含めた中世和歌におけ ではないという事実である。以上より、「本歌取」は定家一人によっ 用するという行為が、常に「本歌を取る」と表現されていたわけ いない。さらに重要なのは、 の当該記事を待ってはじめてあらわれるものである。両書以降 いる。そしてその中で、「定家的本歌取」ともいうべき項目を立て の古歌再利用法を集大成した上で、「本歌を取る事」を分類して に求められる。 (1320-88) と共同で著した歌論書 この一元的認識の淵源は、南北朝時代の歌僧、頓阿 それらの延長線上に立っているといってよい。つまり 頓阿は、 基本的にその見解を踏襲しており、 その歌論書『井蛙抄』及び、二条良基 中世和歌世界において、古歌を再利 和歌史上、『井蛙抄』 『愚問賢注』 頓阿による解釈の圏内を出て の中で、それまで (1289-1372)『愚問賢注 現代の和

の用法にしたがって、価値判断を含まないかたちで再措定した。無批判的に用いられる「本歌取」という用語の概念規定を、実際これらの問題を総合的に解決するために、本論文はまず、今日

それと並行して「古歌取」という概念を提起し、主題としての「心

歌取」が検索するそれは不断に拡張される動的な構造を持ってい が検索する 従来考えられてきたのはそのためであった。しかし、「本歌取」 世和歌が芸術的完成度という観点から見て衰退の一途を辿ったと、 する「古歌取」は、「本歌取」ほどの学識がなくても、志向すべ ての歌人に可能な方法ではない。古歌の詞のみを摂取して再構成 古歌に関する十全な理解と解釈を要求するため、詠歌に臨むすべ 主題として古歌の「心」を踏襲することを特徴とする「本歌取」は、 法の相違に対応させることによって、古歌再利用意識の芸術学的 のアクセスとして捉え直し、「本歌取」「古歌取」をこのアクセス ら「古歌取」への表現論的展開として中世和歌史上に跡づけた。 歌再利用法と、その基盤となる詠歌意識や理念を、「本歌取」か 最高の価値を与える現代の認識が生まれた時代を見定め、各時代 が活躍した新古今時代から、定家を「本歌取」の祖とし、それに 起した。また、「本歌取」を完成させたと現代いわれている定家 き古歌の様態を達成できる方法である。新古今時代を頂点に、中 な射程が導き出される。「古きをこひねがふ」という理念のもと、 の歌論書に言及される古歌再利用法を分析することによって、古 を指標とする、古歌再利用に関するまったく新しい分類基準を提 さらに、古歌の再利用を詠歌の素材検索用〈データベース〉へ 〈データベース〉 が静的な構造を持つのに対して、「古

る。なぜなら、「古歌取」的表現意識は、詠歌の集団性を推し進め、る。なぜなら、「古歌取」的表現意識は、詠歌の集団性を推し進め、る。なぜなら、「古歌取」的表現意識は、詠歌の集団性を推し進め、る。なぜなら、「古歌取」的表現意識は、詠歌の集団性を推し進め、る。なぜなら、「古歌取」的表現意識は、詠歌の集団性を推し進め、る。なぜなら、「古歌取」的表現意識は、詠歌の集団性を推し進め、る。なぜなら、「古歌取」的表現意識は、詠歌の集団性を推し進め、

北野武の映画における暴力の様相

泰秀

裵

ない時点に、これほど強烈な暴力が描写された映画があり、当時、といいのに多様な努力が用いられている。映画が誕生して10年も経ってめに多様な努力が用いられている。映画が誕生して10年も経ってめに多様な努力が用いられている。映画が誕生して10年も経ってめに多様な努力が用いられている。映画が誕生して10年も経ってめに多様な努力が用いられている。映画が誕生して10年も経ってといいのであり、当時、ない時点に、これほど強烈な暴力が描写された映画があり、当時、ない時点に、これほど強烈な暴力が描写された映画があり、当時、ない時点に、これほど強烈な暴力が描写された映画があり、当時、ない時点に、これほど強烈な暴力が描写された映画があり、当時、ない時点に、これほど強烈な暴力が描写された映画があり、当時、ない時点に、これほど強烈な暴力が描写された映画があり、当時、ない時点に、これほど強烈な暴力が描写された映画があり、当時、ない時点に、これほど強烈な暴力が描写された映画があり、当時、ない時点に、これほど強烈な暴力が描写された映画があり、当時、ない時点に、これほど強烈ないます。

する。は暴力に魅力を感じ、歓迎して受け入れていたということを意味は暴力に魅力を感じ、歓迎して受け入れていたということを意味商業的にも大きく成功したという事実は、映画の草創期から観客

の暴力に対する観点をどう変化させたのかを明らかにする。

当時の観客は映画の暴力を、葛藤の解決の手段として主人公にとって正当な行為であると、解釈していた。しかしこのような認識は、アメリカの映画監督、サム・ペキンパーによって徹底的に否定される。ペキンパーは彼の代表作『ワイルドバンチ(The Wild Bunch)』(1969)において、善と悪の対立が存在しない20世紀の西部を背景とし、消え去っていくガンマンたちの暴力的な自滅を描いた。時を同じくして日本においては深作欣二が『仁義なき戦い』(1973)を発表し、仁義と信頼のために命を捧げたヤクザ映画の典型から抜け出し、裏切りと陰謀に溢れるヤクザの凄まじい暴力を描く。深作が描くヤクザ連中はひたすら暴力に依存するが、彼らの暴力にいかなる正当性もあたえない。

(1990)、『ソナチネ』(1993)に現れた暴力の様相が、北野武以前い一人である。北野武も、ペキンパー、深作のように暴力を監督の一人である。北野武も、ペキンパー、深作のように暴力を監督の一人である。北野武も、ペキンパー、深作のように暴力を監督の一人である。北野武も、ペキンパーと深作から影響を受けたこの論文で論じる北野武もペキンパーと深作から影響を受けたこの論文で論じる北野武もペキンパーと深作から影響を受けた

我妻の対話方式であることを暴き出している 力が破壊的な本性に留まらず、意思疎通の不能に答えようとする は拳銃を買う代わりに言語を失ってしまう我妻を通じて我妻の暴 張を用いて、 じたコミュニケーションには非常に効率的な姿を見せる。北野武 る我妻は言語を通じた対話能力をもたない男であるが、暴力を通 表わすために、 のような両極端の概念の差が、意味をもたないものであることを かえって増やしている場面が多い。北野は、 き』では、 1989年に発表した北野武のデビュー作『その男、凶暴につ 経済原則から見ると省略するか減らすべきカットを、 観客を覚醒させているのである。 意図的に構図を破壊した奇形的な構図と反復、 生と死、暴力と抑制 映画の主人公であ 拡

1990年に発表された『3-4X10月』には『その男、凶暴につき』から始まった北野武の暴力に対する執拗な関心が一貫しにつき』から始まった北野武の暴力に対する執拗な関心が一貫したりまれる過程を描いた映画である。北野武は『3-4X10月』で二分化と反復される設定の中に転移と循環される人物を登場させ、二分化と反復される設定の中に転移と循環される人物を登場させ、一つにといる。

北野武が1993年に監督した四作目の映画『ソナチネ』は、

たにもかかわらず、自ら命を絶つことで、死の恐怖から抜け出したができない偶然の穴の中にすべての人物を追い詰めている。偶とができない偶然の穴の中にすべての人物を追い詰めている。偶とができない偶然の穴の中にすべての人物を追い詰めている。偶とができない偶然の穴の中にすべての人物を追い詰めている。偶とができない偶然の穴の中にすべての人物を追い詰めている。偶とができない偶然の穴の中にすべての人物を追い詰めている。

北野武の暴力の三部作には女性に対する不必要な暴力が必ず登場する。それだけではなく北野武が描く男性たちは、女性との円場する。それだけではなく北野武が描く男性たちは、女性との円にあたる男たちとして描かれている。その男たちの連帯意識にはたちは、組織からみれば「要らない男」であり、除去すべき対象にあたる男たちとして描かれている。その男たちの連帯意識には力の「無能」と性的な「不能」に置かれている男性の恐れと共に、女性との性的な接触を事前に遮断しようとする牽制意識が強く現れる。

て有効であるわけはない。北野は純粋に暴力そのものを、映画の置かれている。このような無反応の中において、暴力が手段としうが、北野武がつくる映画の男たちは、暴力に対する反応をほと一般的に映画の手段としての暴力には強い反応が、その後に従

目的にしているのだ。この点は、確かにペキンパーや深作とは異なり、北野特有のことだといえる。ペキンパーの映画には過度ななり、北野特有のことだといえる。ペキンパーの映画には過度ななり、北野式の映画を見る観客は、因果性が欠如した目的としての展力を目撃することにより、強い暴力性を感じることになるのの暴力を目撃することにより、強い暴力性を感じることになるのの暴力を目撃することにより、強い暴力性を感じることになるのに、つまり、北野武は暴力の三部作を通じて、暴力の新しい観点だ。つまり、北野武は暴力の三部作を通じて、暴力の新しい観点だ。つまり、北野武は暴力の三部作を通じて、暴力の新しい観点と可能性を、わたくしたちに提示して見せたのである。

Sōgetsu Art Movement and Tōru Takemitsu(草月芸術運動と武満徹)

Klara Hrvatin

て展開された「草月芸術運動」との関わりを文化史的観点から解トセンター(以下SACと表記)、およびこのホールを中心としトセンター(以下SACと表記)、およびこのホールを中心とし本論文は、戦後日本を代表する作曲家武満徹(1930-

とになる。論文は序と3つの章、そして結論から構成される。
武満は30代をほぼこの草月芸術運動の渦中で過ごした、というこ
明しようとする試みである。SACは旧草月会館の落成後間もな

け花、 では武満がSACにおいて制作した作品、あるいはそこで上演さ 領域・超領域的であり、 リーシリーズ、草月シネマテーク)が紹介される。その活動は生 続いてSACの活動 タッフ、あるいは建物や施設などが当時の資料から再構成され、 れた作品をジャンル別に整理し、さらに武満が国際的な人脈作り 月芸術運動自体を扱った。草月アートセンターの理念、 第2章では、武満徹と草月芸術運動との関わりを論じた。ここ まず序で問題の概観と論文の構成が予告された後、 映画、 音楽、 建築、文学、アニメーションにまたがり、 (草月ミュージックイン、草月コンテンポラ 国際的なネットワークも重視されていた。 第1章は草 目的、 脱 ス

めて多岐に渡っている。 のための作品、劇音楽、管弦楽曲、ラジオのための作品などきわのための作品、劇音楽、管弦楽曲、ラジオのための作品などきわのための作品、劇音楽、管弦楽曲、ラジオのための作品などきわめて多岐に渡っている。

うち、テープ音楽「水の曲」(1960年)、映画音楽「おとし穴」そして第3章では草月アートセンターで創作された武満作品の

治にインタビューを試み、実際の創作現場について論じた。とりわけ「おとし穴」については、音楽の制作に協力した高橋悠(1964年)の3つの作品をとりあげ、詳細な分析を行った。(1962年)、シアターピース「一柳慧のためのブルーオーロラ」

た。そのうち主たるものを次に挙げる。持っていた同時代的意味について、いくつかの論点が導き出され持っていた同時代的意味について、いくつかの論点が導き出され

- のジャズ・アンサンブルのための作品は例外的である。音楽は、多くの場合、映画音楽としてであり、SACの時代た。それ以後、武満が書いたジャズ・アンサンブルのための1)武満が、SACと関連して最初に書いた音楽はジャズであっ
- の音響技術者であった奥山重之助が関与した。は水の滴りの音だけで構成されたテープ音楽であり、SACは」は、とりわけ武満の創作活動にとって重要である。これの、日時に試みられたのはテープ音楽であった。このうち「水の
- 3) SACのためのとりわけ重要な作品群として、ピアノ作品3) SACのためのとりわけ重要な作品群として、ピアノ作品
- シアターピースも、いずれもSACと関係している。ここで+)武満の作品群のうち孤立したグループを形成している3つの

もケージの影響は顕著で、図形楽譜だけでなく、不確定性、 もケージの影響がら抜け出す点についてもSACは場を提供した。 にその影響から抜け出す点についてもSACは場を提供した。 は3つが確認されている。このうち、『日本の紋様』(1962 は3つが確認されている。このうち、『日本の紋様』(1962 に変調され、慎重に画面にあわせて選ばれている。これは、 に変調され、慎重に画面にあわせて選ばれている。これは、 武満が日本の伝統楽器を用いた最初期の作品である。

の音楽制作に関する高橋悠治へのインタビューが収録されている。なお、巻末には、第3章第2節で取り上げられた、「おとし穴」

シューベルト・ルネッサンス1920年代ベルリン・サークルによる

山 口 真季子

ベルトのピアノ作品が今日のように広く認知されるようになるを試みたベルリン・サークルの活動に着目するものである。シュートリアの作曲家フランツ・シューベルト(1797-1828)の再評価本博士論文は、20世紀初頭のベルリンにおいて、19世紀オース

(1882-1951)の貢献が指摘される。シュナーベルの親しい友人に(1882-1951)の貢献が指摘される。シュナーベルの親しい友人には、彼と同様、第二次大戦以前にシューベルトのソナタをレパートリーとした数少ないピアニストの一人とされるエドゥアルト・エルトマン(1896-1958)、さらに二人の友人でシューベルトに傾倒していたことが知られる作曲家エルンスト・クルシェネク(1900-1991)がいた。1920年代ベルリンという活気ある音楽の一中心地において、新しい音楽の方向性を模索する音楽家たちが、シューベルトへの関心を共有したことは興味深い事実である。しかしシュナーベル、エルトマン、クルシェネクらのシューベルトに対する取り組みを、ベルリン・サークルというグループとして見たとき、彼らが実際にどのような活動を行い、どのような解釈によってシューベルトの再評価を試みたのか、その詳細にはこれまで目が向けられてこなかった。

本論文では、シューベルト受容史におけるベルリン・サークルの功績を明らかにするため、まずシュナーベルたちが対峙することになった、シューベルトという作曲家に対するイメージと彼のた。その上で、シュナーベル、エルトマン、クルシェネクらの活動をシューベルトという文脈において見直し、ベルリン・サークルによるシューベルト解釈の独自性を明らかにした。

たのかについて、

演奏会批評を分析した。

した。 ヴィーンにおけるシューベルト没後100年祭(1928)から考察 シューベルトを主人公とするオペレッタ《三人娘の家》(1916) とヴィーン市立公園に建設されたシューベルト記念像(1872) た状況を、クライスレによる伝記『フランツ・シューベルト』 (1865) るものと考えた、伝統的なシューベルト・イメージが培われていっ 第1章では、シュナーベルたちが真のシューベルト理解を妨げ

的

さらにクルシェネクによるシューベルトのハ長調ソナタD840 ネクのシューベルト解釈を、彼らの論考、 リン音楽界の見取り図を提示したうえで、エルトマンとクルシェ 補完を取り上げ、分析した。 第2章では、シュナーベルを中心とする、 書簡等をもとに考察し、 1920年頃のベル

とシュナーベルの録音をもとに、 ル 0) 通じるものとして、シュナーベルに焦点を当てた。まず彼のシュ 、による新聞記事「フランツ・シューベルトのピアノ・ソナタ」 第3章は、エルトマン、クルシェネクらのシューベルト解釈に シューベルト解釈に対する考察を補完したうえで、 ルト演奏の実態を伝記資料、 のベルリン時代のシューベルト演奏がどのように受け止められ さらにシュナーベルのレッスン譜への書き込みをもとに、 一次資料等から示し、シュナーベ 彼のシューベルト解釈を考察し

ことがいえる

的卓越を見出そうとした点において、 ベルリン・サー シューベルトの素朴な主題が見せる性格の多様性を評価し、全て 楽の解釈に外的要素を持ち込まないことを徹底したうえで、 を強化することになった。それに対し、ベルリン・サークルは音 地位のない人物像が、 さや感情の率直な表現が認められる一方で、 からシューベルトを評価しようとしたのである。 した。ベートーヴェンの「主題労作」や「構築性」とは別の観点 の要素の緊張感に満ちたバランスに生き生きとした全体性を見出 の対比が、そうした「オーストリア的」シューベルト・イメージ 音楽双方に適用され、「歌曲王」のイメージのもと、旋律の豊か 入観と結びついた。そして、ドイツの英雄的ベートーヴェン像と シューベルトの慣習的なイメージにおいて、 な居心地良さ、 クルの活動は、 柔和さといった形容詞がシューベルトの人格。 音楽における形式的弱さ、冗長さという先 シューベルトの音楽に緻密な形式 一つの先駆け的存在という 教養のない、社会的 南欧的、 シュナーベルら ヴィーン

明恵上人と華厳経絵画

森實 久美子

においていかに受容され、消化されていったのか、また使用の場 解きながら、それぞれについて、宋や高麗の思想や文物が高山寺 品について、その制作背景や思想的背景、人的ネットワークを紐 現存する作品からたどっていきたい。明恵のもとで制作された作 ういった明恵の思想は高山寺における造形活動にも反映され、高 と真言を融合させた修法を意欲的に創出するとともに、入宋僧ら 華厳と真言密教を兼修した。とりわけ実践を好んだ明恵は、華厳 える。本論では、明恵周辺における宋代文物の受容の在り方を、 〈一二五三〉)等の史料によれば、彫刻をふくめその数はさらに増 に例をみない作品が伝えられており、『高山寺縁起』(建長五年 山寺には「華厳宗祖師絵伝」や「華厳海会諸聖衆曼荼羅」など他 して、それまでの枠にとらわれない自由な思想を展開させた。そ によって大陸からもたらされる新しい情報や文物も積極的に摂取 (一一七三~一二三二) は、青年期を主に東大寺と神護寺で過ごし 鎌 倉時代はじめ、 京都・高山寺を拠点に活躍した明恵上人

についても考察を行い、高山寺における位置付けについて試論を

述べたい。

いた環境を想定した。
いた環境を想定した。
いた環境を想定した。
との形本も蓄積された充実した環境での制作であり、有力な外護者の協力のもとで専門的に絵画制作を請け負ってり、有力な外護者の協力のもとで専門的に絵画制作を請け負っていた環境を想定した。

が晩年に傾倒した華厳の観法、仏光三昧観を実践する目的で建てっている第二章では、同じく高山寺に伝来する「華厳海会諸聖衆曼荼羅」が描かれたものと推測した。さらに、明恵示海会諸聖衆曼荼羅」が描かれたものと推測した。さらに、明恵示海会諸聖衆曼荼羅」が描かれたものと推測した。さらに、明恵示海会諸聖衆曼荼羅」が描かれたものと推測した。さらに、明恵示海会諸聖衆曼荼羅」が描かれたものと推測した。さらに、明恵示海会諸聖衆曼荼羅」が描かれたものと推測した。さらに、明恵示海会諸聖衆曼荼羅」が描かれた三重宝塔は、その尊像構成から、彼が晩年に傾倒した華厳の観法、仏光三昧観を実践する目的で建てが晩年に傾倒した華厳の観法、仏光三昧観を実践する目的で建てが晩年に傾倒した華厳の観法、仏光三昧観を実践する目的で建てが晩年に傾倒した華厳の観法、仏光三昧観を実践する目的で建てが晩年に傾倒した華厳の観法、仏光三昧観を実践する目的で建てが晩年に傾倒した華厳の観法、仏光三昧観を実践する目的で建てが晩年に傾倒した華厳の観法、仏光三昧観を実践する目的で建ている諸聖衆といる。

きたい。

絵画として捉えられていたことを指摘した。る顕密一致の思想の具現化のために欠かすことのできない重要なられたものであり、「華厳海会諸聖衆曼荼羅」は、明恵が標榜す

第三章では、明恵が熱心に広めたという「華厳海会善知識曼荼第三章では、明恵が熱心に広めたという「華厳海会善知識店本」を復元的に考えるため、毘盧遮那如来および善財童子歴参図それぞれについて、大陸における展開を史料と現存作品からたどり、「善財善知識店本」とは、江南の地に起こり、南宋時代に栄えた、華厳禅の流行の中で生み出されたものだという「善財善を提示した。そして、明恵は、その図像をいち早く取り入れ、様々を提示した。そして、明恵は、その図像をいち早く取り入れ、様々を提示した。そして、明恵は、その図像をいち早く取り入れ、様々な場で使用したことを指摘した。

ききった。 を依頼した絵師は、 られず、この作品をもって明恵の宋画受容に対する積極性を語る 場するいちいちのモチーフについて明恵が指示を出したとは考え の絵師が居たことが史料から分かっており、 ことは適切ではないかもしれない。 三作品の制作背景は一様ではない。とりわけ義湘絵は、 わめて重要な役割を果たしている。 以上のように、本論で考察を行った三作品において、 絵師が宋との直接のパイプを持っていたという意味で 豊富な粉本をもとに異国の風景をみごとに描 しかし、 しかし、当然のことながら、 その中から彼が制作 明恵の周囲には複数 絵巻に登 宋画はき

さまざまな方面から及んでいることが分かると同時に、当該期にに見られる宋画の影響は、決して明恵一人に負うものではなく、トプットする力を備えていたのである。明恵周辺で描かれた作品はなく、絵師も大陸の情報を間接的ながらも受容し、それをアウ

おける宋画の浸透ぶりもうかがわせて興味深い。

新の南宋の情報を得ることができたのである。しかし、 う環境にあった。彼の身近なところには複数の入宋僧がいて、最 子たちに語らなければならなかった。そういったとき、明恵は伝 ものであり、 明恵は新渡の図像を採用し、 入れて造形活動に反映させていったことをあらためて強調してお 華厳と真言に軸足を置きながら、さまざまな情報を選択的に取り それを盲目的に受け入れたのではなかった。 牽引しようとしたのかもしれない。幸いにも、 統的な図像ではなく、誰も見たことのない図像によって、彼らを 興して以後、 に用いる絵や仏像は自らの思想を具現化するために最低限必要な ささか状況を異にしている。この二つの絵を制作するにあたって、 く指示を出したのではないだろうか。明恵にとって、 方の 「善知識曼荼羅」と「諸聖衆曼荼羅」 明恵は自らの顕密一致の思想を、説得力をもって弟 生命線といえるものであった。とくに、高山寺を中 画面構成や尊像構成についても細か 幼いころから学んだ は、 明恵はそれがかな 義湘絵とは 日々の修行 明恵は